

失われたものの記録

望郷

文・絵

男全富雄





大八車に肥料を載せて、夫婦で力を合わせて運ぶ。



赤ん坊をあやしながら働く主婦。



春の日溜まりの中で、ひとときの昼寝を楽しむ。

望郷

静かだなあ
 時計が止まったみたい
 雑木林に囲まれた田圃道
 日向ぼつこの土手に寝そべり
 眩しいお日様に帽子を顔に寄せ
 贅沢に太陽を一人占めた温もり
 早春を乗せたやわらかい風に
 落ち葉が駆けより
 そっと囁いた
 お休み
 汽笛が夢の中に
 遠く消えていった
 このまま地球の回転が
 止まってくれないかなあ
 懐かしき過去の故郷



初夏、田圃に螢は湧いてくるほど飛んでいた。



大雨の後はドジョウがよく捕れた。

失われたものの記録

望郷

目次

厳しくも豊かな農村の暮らしがあった	9
遥かなる道(はじめに)	10
北山田の今昔	12
農業	16
歳の神(ドンド焼き)	18
地神講	20
大山代参	20
雨降り正月	21
山田富士の草刈り	22
公民館	24
共同出荷	26
椎茸栽培	28
農機具	30
自動車	30
樽の電気洗濯機	31
道路普請	34
火の用心	36
長徳寺焼失	38
消防団の歩み	38

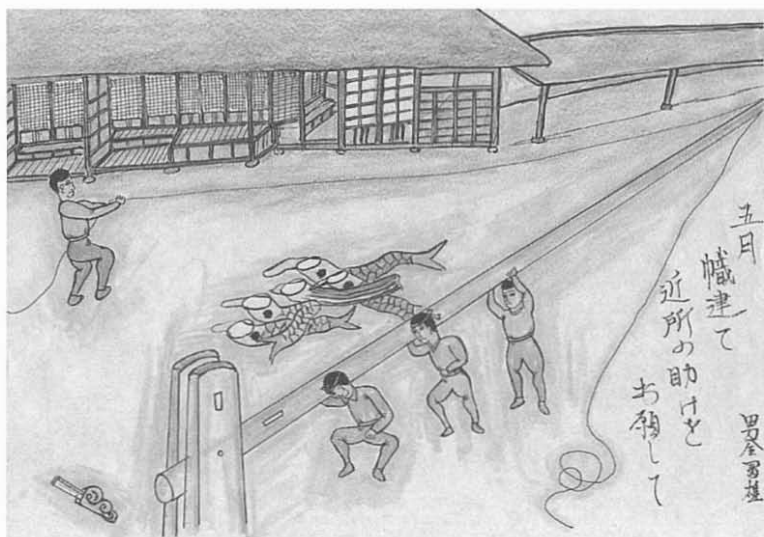


開発前の北山田

戦争が暮らしを変えた

自警団		40
有線放送と電話		41
動力線		41
陸上競技		42
お祭り		44
山田富士の桜祭り		47
演芸		48
狐火		50
十五夜		51
嫁入り		54
昭和初期		60
山田富士の赤松、皇居へ		62
東京見学		64
小学校		65
高等科から青年学校		67
学校に戦車隊		68
松根油掘り		70
青年学校の靖国神社参拝		70
助教訓練		71
暁天動員		73
婦人特攻隊		74
送別会		74
戦没者の合同葬儀		75
照空隊と高射砲隊		79
空襲		80

59



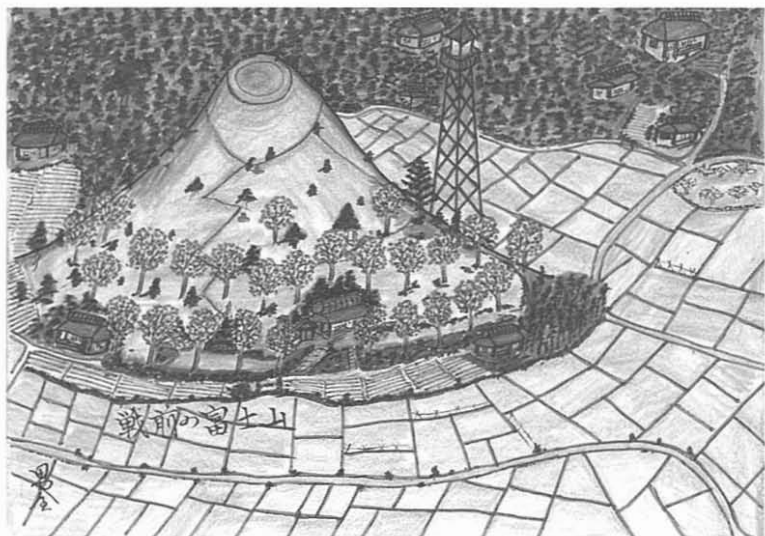
五月の節句の鯉のぼり。隣近所の助けがなければとても建てられない。

思い出すままに

知覧の丘	85
降伏のピラ	94
物資の不足	95
終戦	96
青年学校の武装解除	98
復員	99
戦後	102
大規模土地開発で村は街になった	105
洪水	106
農業に暗雲	106
ニュータウン	107
移転	108
五十五年完成	110
区画整理審議会委員選挙	116
生活対策	118
審議会解散	122
住居表示	124
室内水泳競技場誘致	125
北山田小学校開校	126
中川中学五十周年に思う	127
故郷	130



夏につるす蚊帳は蛍を放したり、夜話をしたり楽しいものだった。



戦前の山田富士。今は山田富士公園として整備されている。



農家の二階は蚕の部屋になっていた。当時、どの家も蚕を飼っていた。

厳しくも豊かな農村の 暮らしがあった

大正末期から昭和末までの
横浜市港北区（現都筑区）
北山田の暮らしから



山の畑まで坂道を登り、水や肥料を運ぶのはたいへんな作業だった。

遙かなる道（はじめに）

振り返れば遠い道程だが、前を見れば明日が見えない。

未来を想像して息のある限り生きねばならない。

われわれの年代ほど、波瀾万丈の世を経験してきた者はないであろう。青少年期は大日本帝国、無敗を誇る軍隊を信じていた。

昭和二十年八月十五日を境に、敗戦国に転落。

食糧もなく、情報は大混乱し、貧困のどん底の生活を経験し、新生日本を旗印に復員兵を中心に団結、あらゆる事を模索、実行し、豊かな農村を築いた。

四十年代になり、港北ニュータウンの風が吹き荒れ、故郷は一変した。

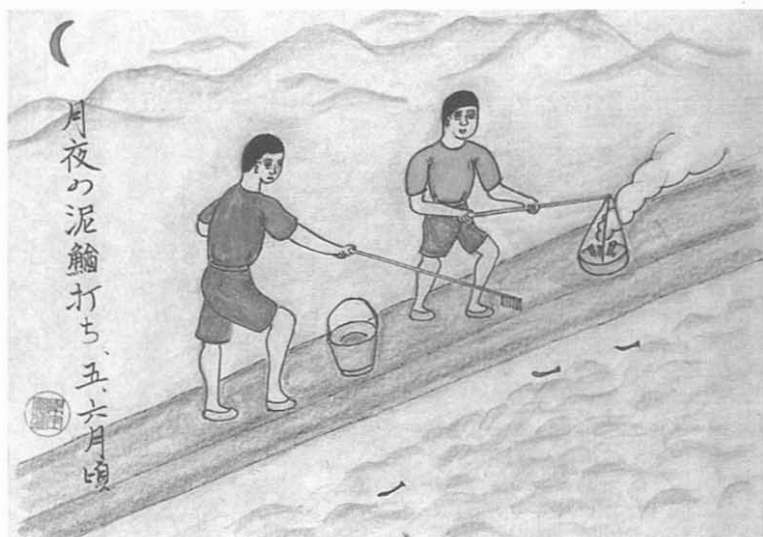
蜆の小堀、鰻、カタツケ（貝の一種）、モクタ蟹のすみかの小川、タンポポ、ツクシの土手、四季折々衣替える雑木林、肥えた田圃、豊かな畑、竹林、お互い助け合う人情も、地下に消えた。

第二の故郷を作るため、思考錯誤しているが、時間がたてば、人情豊かな街に必ずなると信じている。環境の良い街は人情のある街であり、実現しなければ、土地を犠牲にして開発に踏み切った者として先祖に申し訳ない。

思い出してはキーを叩いたので、話が前後してまとまりがない。

遠く遙かな人生だが、故郷と歩んだ足跡を一部残す。

厳しくも豊かな農村の暮らしがあった



夜、田圃の縁で明かりをとると、ドジョウがたくさん集まってきた。



川には鰻、鯉、鮒、カタッケ、モクダ蟹などがたくさん棲んでいた。

北山田の今昔

日吉元石川線は、元は田圃^{たんぼ}で、その真ん中にきれいな小川が流れており、道路を中心に八十二戸の農家がお米や野菜を作っております。今のすみれが丘も北山田でしたが、約二十五年前に新しい町になりました。

小川は元のすみれが丘の山から流れてきて、顔も洗い、飲めるきれいな清水で、川には、鰻、カタケ、毛蟹などが捕れました。

洗濯や野菜の洗い場としても使われ、災害の時には貴重な防火用水であり、子供のよい遊び場でもありました。七月頃になりますと、邪魔^{じゃま}になるくらいの蛍^かが田圃から湧いてくるかと思うほど飛び交っております。子供の頃、蛍を捕まえて蚊帳^{かや}の中に放し、楽しんだものでした。

緑の中に住んでいたので空気はよく、月夜の晩は本が読めるくらいでした。家庭の電灯は今の二燭^{にしよく}くらいの明るさなので、月夜の方が明るく思えたのかもしれませんが。

小学校までは三キロや四キロは当たり前、山坂を二つも三つも越えて通学しましたが、舗装された道は当然のことながらありません。砂利道はよい方で、霜解^{しもと}けの農道を滑りながらの通学です。

その頃学校では以外と衛生は厳しく、手拭^{てぬぐ}いを忘れると家まで取りに行かされました。山道を一人で泣きながら家まで取りに行き、学校に戻りますと一時間目の勉強は終わっております。

宿題を忘れると、廊下に立たされます。高学年になりますと、水を入れたバケツを持たされ、廊下に立たされるくらい罰が重かった。物資がない時代でしたので、筆記用具は先生と親に帳面をみせて無駄なく使ったか、確認をしてもらい、新しい帳面を買う許可が出ました。鉛筆は短くなったら竹の

穴に差し込んで使い、これも先生、親に見せてから買った。お習字はほとんど半紙は使わず、新聞紙を四つ切りに切って練習し、最後に一枚先生から半紙をいただいて書いた。

新聞も各家庭ではなかなか購読できない時代でしたので、字がわからなくなるくらい使うほど、紙は貴重品でした。

お弁当は、麦飯に梅干の日の丸弁当でした。弁当箱の蓋に梅干の跡が酸で穴があいてしまいました。弁当箱を持ってくればよい方で、さつま芋を新聞紙に包んで持ってくる子も多かった。

農繁期には、学校に子供を背負い、子守をしながら勉強する人もいた。朝、学校に行く前に、必ず庭の掃除、縁側の雑巾拭きがあり、冬は辛かった。急がないと学校に遅れるので、夢中でした。

宿題は多かった。家に帰れば、五、六年生になると家の手伝いが必ず待っています。野良へのお三時運び、水道がなかったので風呂やお勝手の水汲み、風呂焚き、子守、野菜洗い、農作業の手伝いと、宿題をする間がない。

夜は暗い電球の下での宿題です。家には決められた電球以外にコンセントで使うと、電力会社の社員が来て没収または送電中止させられたので、電球については厳しかった。警察より電力会社の社員は一般家庭からは恐れられていた。

学校に使う鞆は、たいがい近所の先輩のお下がりをお願い、大事に使い、また後輩に譲った。ボロボロになるまで使われていた。教科書も親は一年先輩の家にいき、貰い受け、足りない物だけ買った。親はいかに出費を少なくするか、大変でした。子供も親の苦労を見ているので、大事に使った。

終戦前は学校にも軍隊が入り、勉強するところがないので、お寺、お宮、公民館などに別れて勉強をした。勉強は先生が兵隊に行かれて自習が多かったが、上級生がよく面倒を見ていた。天気の良い日は、出征兵士の家の農作業の手伝いが頻繁に行われたが、空襲警報が度重なり、終戦間際は勉強らしい勉強はできなかった。

防空壕の中に教科書や筆筒を入れたが、湿気が多く、筆筒は剥がれて壊れてしまい、中の衣類も

湿気でボロボロになってしまった。もちろん教科書も傷んでしまった。

市内の中学生は先生に引率いんそつされて農作業の手伝いに、よく農家に一週間泊まりがけで行き、勤勞奉仕に汗を流していた。食糧難のために、農家に泊まれば食事は心配ないと好評でした。

帰りのお土産に食料を上げたら、家族からいていねいな手紙をいただいたが、その生徒は、少年兵を志願して沖繩で戦死したと、戦後、級友から聞きました。

確か十七歳だったと思う。終戦が半年早かったら……、残念でした。

香揺らぐ 墓標に染まる 彼岸花

教科書を そつとしまいぬ 土用乾し

英霊を 迎えるラッパ 神無月

風冷える タベ公報 ただ無言（戦死公報）

秋撒きに 雷雲探す 藁帽子

応召に 妻子に余生を 説く兵士

赤紙に 涙墮して 妻の秋

雪しぐれ 夜行列車の 音かすか

厳しくも豊かな農村の暮らしがあった



登校前は必ず家の掃除をしなければならない。しないと厳しく叱られた。



学校から帰れば帰ったでさまざまなお手伝いが待っている。

農業

私が子供の頃は西瓜の栽培が盛んだった。その頃では珍しく、飯田運送のトラックが庭まで入って西瓜を積みきた。今の二トン車くらいだと思う。西瓜の収穫には近所の方が手伝いに見えていた。夜、蚊帳の中で西瓜の積み込みを姉たちと見ていた。小山田の茂作さん、清助さん、芝生（地名）の庄太郎さん、特に庄ちゃんには、お風呂にいられてもらったり、家族同様にしていただいた。果樹が多かった。栗、桃で、主に桃は六反栽培していた。父の実家が桃栽培の専門であった関係もある。

桃栽培は手間のかかる農業だ。冬、桃の木の下を鋤で耕し、枝の剪定作業は父がやるが、枝を集める仕事が大変。学校から帰ると必ず桃畑に行かされ、作業させられた。

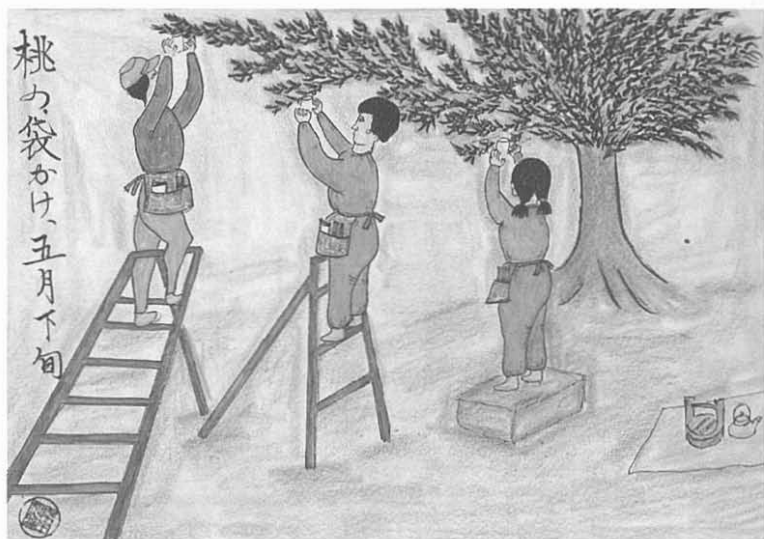
春、硫黄黄剤の散布は目は痛くなり、臭いし、我慢して一日手押しポンプを押し続けた。五月は袋掛け作業、一個づつ袋をかけ、リュウキュウという草の乾燥したヒモで縛るのだが、キャタツに乗っての仕事はつかれた。

よく城山（地名）に手伝いにいったが、従兄弟の貢さんは明るい青年だった。フィリピンの戦闘で終戦間に、重傷を負いながら切込隊として戦死した。戦後、戦友が何度も切込隊参加を止めたが、負傷の身では迷惑かけると聞かず、行ってしまったと知らせてくれた。

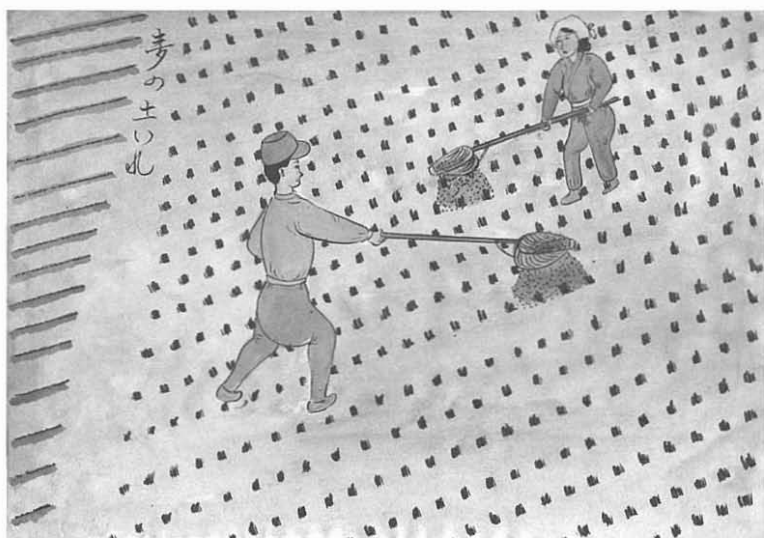
袋掛けは、時期が限られているので忙しい毎日だった。ちようど田起こしと麦の収穫が重なり、重労働となった。七月、早生桃の収穫が始まり、晩生が終わるまで一ヶ月かかった。

桃を詰める箱の制作が間に合わず、大工さんをたのんだ。包装は箱の底に敷き藁を薄く敷き、セロ

厳しくも豊かな農村の暮らしがあった



中川の桃という商標があるほど、甘くておいしいと評判がよかった。



麦は秋に播き、冬の麦踏み、春の土入れを経て、6月頃収穫をする。

ハンの化粧紙をその上に敷き、桃を普通六個並べ、一個づつ桜紙で包み、動かぬようにバッキンをいれて出来上がりだが、桃は軽く三本指で持たないと傷んでしまうので神経を使う。仕上がった桃の箱を五箱づつ重ねて梱包し、ゴムタイヤの馬車で東京まで出荷した。

たしか、北山田で桃栽培農家は六軒だったと思う。

この桃栽培も昭和十九年、主食を作らなければ非国民だといふので、強制伐採させられた。

歳の神（ドンド焼き）

歳の神（ドンド焼き）は、戦前は各谷戸の辻で行われていた。

昨年使われたお札、お守り、大掃除の煤竹、新年の松飾り、書き初めなどを持ちよって焼く。各家庭で紅白のお餅の団子を枝に刺して、残り火で焼き、その餅を食べると今年は健康で送れると言われる。また、餅を刺した枝で柿の木を叩くと柿が豊作になると伝えられている。

昔は農家の屋根は草葺きで、よく火が飛んでも事故がおきなかったと思う。当番の方が、お酒、茶菓子を準備して盛大に行われていた。

これは先代の、暮れや正月の始末に困る物を一括して燃やし、正月気分を整理する生活の智恵と感じます。

近年は子供さんが平等に楽しめるように、町会の役員や理事で餅つきをして、会員に配布してあります。

餅つぎの 噂話に 薪が跳ね

ドンド焼き 残り火整理の水凍てし

ドンド焼き 餅焼く頬が 先に焼け

餅つぎの 亭主あぎれる こまめぶり

松飾り 車で入場 ドンド焼き

燃え上がり 役員安堵の 歳の神

残り火消え 背な丸くなる 歳の神

歳の神 薄闇消える 子らと餅

一里塚 燃やして過去が ほしくなり

初参り 財布覗いて 何祈る

屠蘇の顔 巫女冷し頬 初参り

地神講じじんこう

春、秋の彼岸には農家は必ず仕事を休み、地神様のおまつりである地神講をした。

当番制により回り持ちで宿を受け持った。娯楽もない時であり、農繁期前の骨休みとして休憩でき、先代の生活の知恵ではないか。

当番の家では、春はおはぎ、秋はじざい餅を作ることに決まっていた。両隣が手伝い、ご馳走を作り、昼食から夕方まで、飲み食いして情報交換の場として楽しく過ごした。

近年はこの行事を行うところが少なくなったが、私らの組では休みなく続いている。

大山代参

昔は徒歩が交通のたて前であり、お駕籠は特殊階級だけの乗り物でした。

何時の頃からの伝承かわかりませんが大山参りが行われるようになり、当然のこと大山には徒歩で行き、御神酒を頂戴して下山してきたようです。毎年行くには代表を選び代参してもらうことになり、現在に伝わっております。

横浜市ふるさと歴史財団により解明されたところによりますと、当時の御神酒社二基が揃っているのは、北山田だけということが判明しました。

平成三年、北山田で保存すべきか、市に移管して保管をまかせるべきか話し合った結果、傷みがひどく、管理も出来ないかと判断し、市に移管いたしました。

四年の現在、御神酒社は市の文化財で燻蒸処理され、その後、京都の文化財修復研究所に送られ、多額の費用で修復されました。現在はセンター北駅前横濱市歴史博物館に陳列されております。私が記憶している大山代参の行事は盛大でした。

当番らしい方数名が白装束に身を固め、金剛杖をつきながら、山田富士の頂上まで歌は忘れましたが、よく小泉峯吉さんが音頭をとって登り、頂上でお祈りの行事が行われました。それから御神酒を戴き、倶楽部の庭で部落二派に別れ、大きな樽五、六本に用意した水を双方がかけあいました。

これは雨乞いの行事と思います。

大山代参は家内安全、五穀豊穡、町内安全を目的としており、毎年八月上旬に行われております。

代参の 御神酒酔う夜 盆近く

雨降り正月

雨は天の恵みと言われていたが、農家ほど天候に左右される職業はない。

長雨が続けば作物の成育は悪くなるし、収穫物の品質は落ちるし、腐りもする。

干ばつが続けば、田圃は困る。

だが、照りに飢饉ききんなし、とか昔から言われております。適度のお湿りがあれば農家は幸いなのです
が、思ったようにはいきません。

七月頃、田圃に一番水が必要な時、干天かんてん続きになりますと大変です。田の草は取れず、分けつぶんけつ（株かぶ分ぶんかれ）が進まず、穂出はだし水不足で収穫に影響します。

畑は粟以外、成長が止まってしまいます。

雨が待たれる時に雨が降りますと、部落長から雨降り正月のおふれが出て、全員仕事を休むことになつておりました。この頃は農繁期の真つ最中で、身体も疲れているので、骨休みと言われていました。これも、昔の人の生活の知恵ではないでしょうか。よく守られており、若い者には喜ばれておりました。

藁帽子 雷雲探す 日照り田に

水撒きに 雷雲遠く ホース引き

山田富士の草刈り

毎年七月一日午前五時に、町内全員で山田富士の草刈りが行われておりましたが、平成二年から中止しております。以前は山田富士全域を町内で維持管理しておりました。その後、住宅・都市整備公団の管理になり、公園として整備され、市に移管されました。

伝統行事として伝承されてきた行事が、また一つ消えてしまいました。

厳しくも豊かな農村の暮らしがあった



「六根清浄、散華散華」と唱えながらの雨乞いの行事。雨の降らない年には熱心に行われた。



雨の日は、蓑傘つけて草刈りをした。

公民館

北山田公民館の前身は、山田富士（長泉寺の寺領）の裾野すそのにあつた長泉寺の草葺くさぶききの太子堂たいしどうというお堂です。

このお堂が部落の若い衆の集まり場所で青年倶楽部になり、いつしか倶楽部として部落の中心になり、いつの年代からか富士山全山の町会で寺から借用管理して、毎年ねん年貢米ねんぐまいとして青年会が各戸よりお米を集め、俵はたけにして寺に納めておりました。

桜の手入れ、草刈り、清掃と部落の人の山田富士への愛着あいしやくは深く、戦地からの軍事便ぐんじびんも「桜が咲いたか」と記されておりました。

南みなみからの登山道を御殿場口、西からの道を吉田口と言われ、途中には胎内洞たいないどう（陥没かんぼつ）があり、白山はくさん様、伊豆権現いづごんげん、箱根権現はこねごんげん、その他の碑が多数あり、裏側には賽さいの河原かわらに子育地藏こいくじざうがあつて、倶楽部とともに愛されておりました。

倶楽部も、何回か木を伐採して製材所に持っていくき、建築用材をとつて補修ほしゅうを繰り返しましたが、昭和三十二年、会員の寄付金で建て替え、北山田公民館と呼ばれるようになりました。

戦後、桜の苗木を青年会で注文、小机駅こきえきの苗木会社に取りに行き、会員で植えました。また牛久保の田丸さんから八重桜の苗木を数本寄付され、植えられました。

現在残つて咲いているのがそうです。

造成により、かなり裾野すそのが削けずられました。

その中に斜めに広場に迫り出した大きな松の木がありました。言い伝えによると、昔、太子堂に

寄られたお坊さんが亡くなり、松の木の下に葬ったということでしたが、昔のことですので、噂として聞き流しておりました。

山田富士組がバックホーで工事中、噂の場所から頭蓋骨が出てびっくりしました。急ぎ公団を呼び、住職にご足労願ひ、懇ろに弔いました。

このことで太子堂の存在が実証されました。移転に伴い公民館に祀られていた太子様は、長泉寺に鎮座されています。

盆法要 香煙に母の 面影を

彼岸花 墓参うながす 畦に濃く

迎え火に 思いの顔が 闇に浮く

盆休み 過去だけ思ふ 歳になり

盆くれば 思い出す人 歳取らず

盆供養 読経の中 父母に会い

落葉踏み 悲報の通知 重なりて

彼岸空 何処に届く 香煙焚く

共同出荷

北山田の野菜出荷組合は盛大であつた。

八十名の組合員で野菜の共同出荷が行われていた。

東京大崎、蒲田市場が主であつた。

農協のトラックで一日置きに朝六時に芝生^{しばう}の出荷場に持ちより、当番五、六名が積み込みから精算まで各戸に仕切伝票を配布して行い、帰宅は午後早くても三時頃になつていた。

野菜を詰める箱も共同で購入、役員が割当配布したが、農作業の合間に行つていたので、担当役員は大変でした。

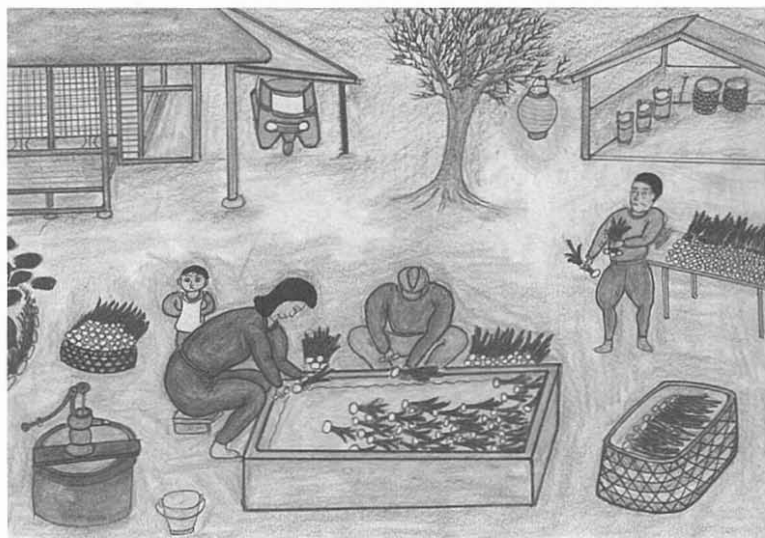
トラック輸送の前は三輪車で運び、荷が多すぎて道中坂が上がれず、バックして後押しをしながら運んだ。現在なら積載^{せきさい}違反^{いはん}で処罰^{しょばつ}物です。

夏はトマト、茄子、キュウリ、スイカが主な物で、秋冬は、柿、山芋、カブ、白菜、大根、レンソウ、小松菜、春はエンドウ、竹の子、椎茸、ねぎと、四季を通じて出荷は切れなく続いた。

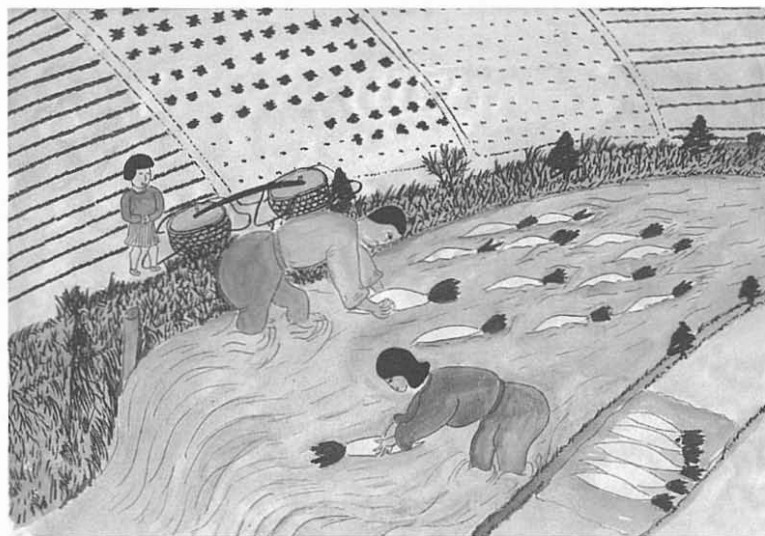
近隣では一番の組合であつたが、役員の献身的奉仕^{けんしんてきほうし}があつたからこそその実績と思ふ。

共同の難しさは、お互い理解しあい、競つて気ままな発言や行動を慎^{つつし}むことで、目的のため協力したのが成功した要因と感じた。

厳しくも豊かな農村の暮らしがあった



収穫した野菜はきれいに洗って出荷の準備をする。子供たちも手伝った。



大きな大根は川で洗う。

椎茸栽培

酪農は落農だと言われるくらい過酷な労働が強いられたのか、私の右手の握力が急になくなってしまい、湯飲みも持てなくなつた。

家族会議を開き、急速、酪農をやめることになり、千年の業者に乳牛を引き取ってもらいました。が、廃業ということで、二束三文でした。

廃業した当時は朝四時になると目が覚め、庭に立ち、酪農の癖がなおらなかつた。

時間が自由になり、ようやく人並みの生活に戻つたが、妻には大変な苦勞をかけた。

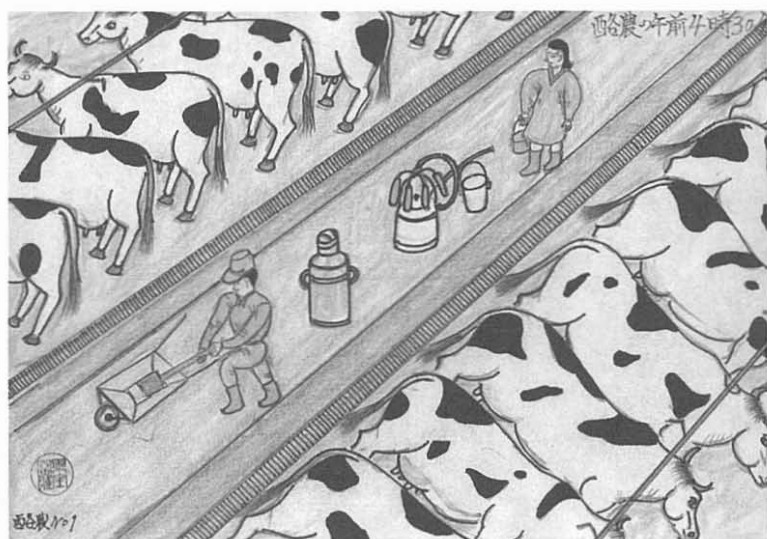
その後、牛舎を利用して椎茸栽培を始めた。港北で三十名くらいおられて、中川では十二名の栽培者がいた。いつも研究しあい、原木の共同購入をした。原木は夜中にトラックで運搬されてきたが、トラックから一本づつ降ろすのが大変で、家族総出で手が無い時は近所の人を頼んで作業した。一台八千本は積んできた。

年間通して出荷できるように、春、秋、夏、冬用の椎茸を栽培していた。春、秋は自然の氣候で出るが、冬は暖房し、夏は冷房して栽培した。冷房は自動車のラジエーターを取り付け、扇風機を回して冷房室にした。菌を植えるのは、近所の方に手伝ってもらい一ヶ月はかかった。

菌を植えてから二年は養生して三年目からようやく椎茸が発芽してくる。ほど木（原木）は出荷に使えるのは三年くらいであつた。

収穫した椎茸は百グラムづつ網の袋に詰め、川崎市場まで夜中に出荷した。栽培も軌道に乗り、五年栽培までこぎつけたら、ニュータウンで放棄、全滅してしまつた。

厳しくも豊かな農村の暮らしがあった



酪農は、朝は4時半、夜は11時まで、365日休みのない仕事だ。



運搬や農耕に使う牛は大切に飼われていた。夕食の前にまず餌を与える。

農機具

戦後三十年代になり、急速に耕耘機が普及した。最初は小型のクボタが普及し、田起こし、代かきに威力を発揮していた。これにより、農家の労働はかなり軽減できた。

中型耕耘機が出回ったが、小型ほど利用されなかった。脱穀機、籾摺機は、目覚ましい新機械が出回ってきた。草刈り機の変化も著しい。重さも三分の一くらいになった。

小型耕耘機に接続するリヤカーが運搬具として牛車にかわって使われていた。小型耕耘機はあらゆる機械の動力源として多用された。

機械ではないが、一輪車の普及は畑作業に、その他の小運搬作業にはなくてはならない道具になっていた。

すみれが丘に町が造成されてから、田圃に入れるきれいな水がなく、共同で井戸を掘り、水中ポンプで水を引いた。この頃から生活環境が変わり始め、農村北山田の将来に不安が出てきた。

自動車

自動車は夢のまた夢であった。

とにかく三輪車が農家で使われるようになったことは画期的であった。最初、農家が三輪車を持つ

ことは、経済を考えない無謀なことと言われていた。その三輪車も初めは棒ハンドルで、丸ハンドルになった時は、夢のようであった。今してみれば、高級乗用車を取得した気分であった。

三輪車のよいところは、回転半径の小さいこと、燃費がよく、路地でもハンドルの余裕があったことだが、三輪のため、安定は悪かった。

その後、軽自動車ミゼットが普及し重宝したが、この頃、軽三輪が再び見直されていた。

三十年後半頃から、四輪車にかわり、いつしか農家でトラック、乗用車と二台持つようになり、近年は一人が一台持つようになっていった。

当初は自動車のパンクは付きもので、パンク修理も自分で行った。

三輪車の初めは、始動は足で踏み込むキック式だったため、かかとの関節を傷めた者が多かった。四輪車の始動は、クランクでエンジンを回してやるが、ガソリンの吸い込み過ぎでエンジンがかからず、何回もプラグを掃除してやっと始動させた。

道路の路肩が弱く、落車が多かったが、運転手は見知らぬ者でも手伝いあった。

嫁入りにも三十年代は農協の三輪車が多かった。

運転手が酔っぱらっても車が少ないので事故はなかった。自動車の普及によって東京方面への肥沃な牛車から三輪車にかわった。

樽の電気洗濯機

戦後いち早く普及したのが、二斗樽の電気洗濯機ではないか。

農家の主婦にとって一番大変なのが洗濯であり、農協で少しでも主婦の労働軽減のためにと普及し

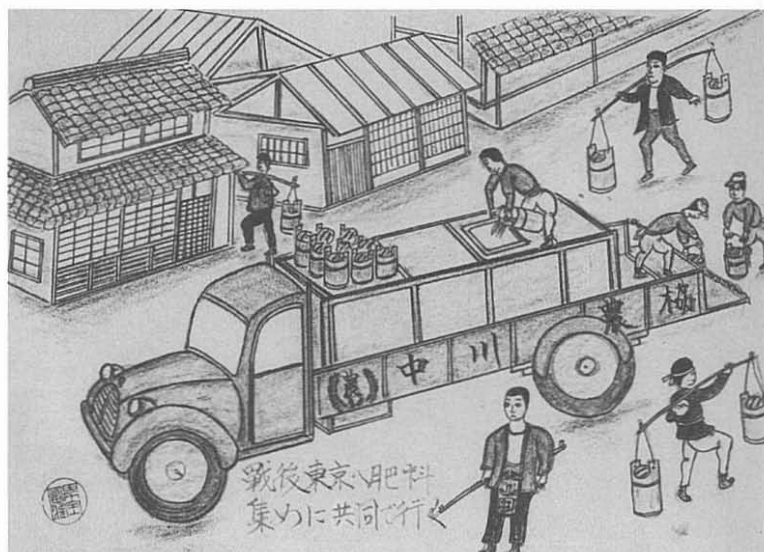


野良仕事に牛車はよく使われた。力持ちだがのんびりとして遅かった。



棒ハンドルの三輪車。車の使用は農家にとって画期的なことだった。

厳しくも豊かな農村の暮らしがあった



四輪車のトラックが出始め、肥料集めも牛車からトラックに。



路肩の弱い道路は、地元で砂利を敷き整備した。

たと思う。

二斗樽の横に攪拌機かくはんきを取り付け、農耕用モーターでベルトを回す仕組みになっていた。セツトが大変だが、仕事に行く前に旦那だんながやっていたようです。

当時はこの洗濯機のため、主婦にはある程度、負担がまぬがれたのではないか。その後改良が進み、衛生的にも主婦業にも明るい話題になった。

道路普請ふしん

各谷戸やとで、道路普請はかせない共同仕事だった。部落全員道具を持ちより、一日奉仕した。路肩ろかたが弱いので、杭くわを打ち、土の補給をするのだが、問題は砂利じりが不足していた。

農協や役所から配給される砂利を大事に農道に敷いたが、とうてい足りない。

農協トラックで多摩川の河原まで砂利積みにいった。

なにしろ、六トン車にシャベルで手積みてづみをする。十人くらいで積み込んだが、ようやく積み終わったら車輪がめり込んでしまった。さらに、無理をしたので自動車のジョイントが折れ、せっかく積んだ砂利を今度は手作業で降ろし、車の修理をした。

部落とは連絡がとれず、近所から自転車借りて部落まで走り、今日は砂利が来ない旨を伝え、今度は河原にいる者に弁当を自転車運んでもらい、昼飯を夕方食べた。

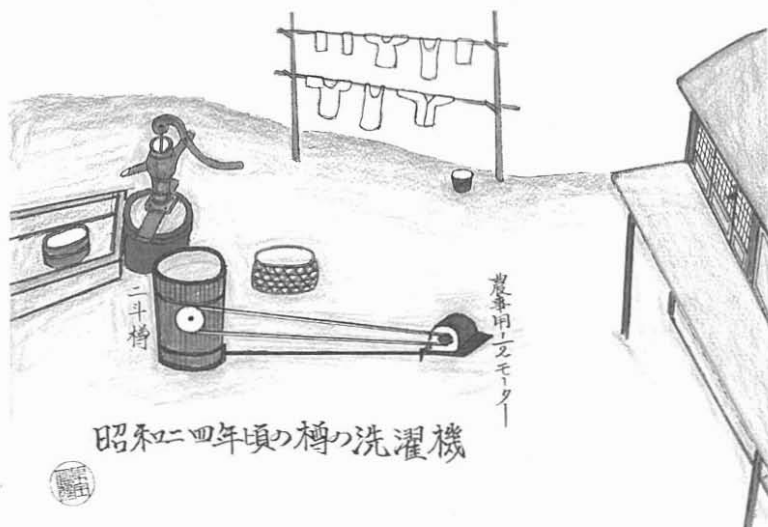
結局、車は修理できず、全員シャベルを担かかいで多摩川から歩いて帰ることになった。夜十時頃、部落にたどりついた。

有線もなく、電話もなく、最善の努力をした結果であり、誰一人文句は言わなかった。乳牛を飼う

厳しくも豊かな農村の暮らしがあった



主婦にとって洗濯はたいへんな仕事だった。



家電のはしり樽の電気洗濯機。これで主婦の労働がだいぶ軽減された。

前だった。

配給する砂利を配分する役員は大変、少しでも不公平にならぬよう気をつかっていた。石油箱一杯の砂利の尊いこと、今は笑いごとだが、当時は真剣だった。

火の用心

年末になると夜番が回ってきた。

二人一組になり、夜十一時と朝二時頃、一軒づつ拍子木ひょうしぎを叩き、軒下のきしたに立ち「ご用心なさい」と声をかけ、返事があるまで、声をかけた。

霜が降りて寒く、ひと回り回るとコタツに入り二時まで休み、また出かけた。

二回目はつらかったが、遠く他部落の拍子木が聞こえ、仲間もやっているなと、懐中電灯を頼りに回った。

終わって別れ休もうとすると、誰か玄関の戸を叩く。

「どなたですか」と戸を開けると誰もいない。

閉めるとまた叩く。その繰り返しである。

「この野郎、狸たぬきの仕業しわざだな」と構かまわずにいると、今度は縁側でトントンと馬が走り回っているような音を出して悪戯いたづらをする。

あきらめて構わずにいたら、狸もあきらめ、悪戯をやめた。

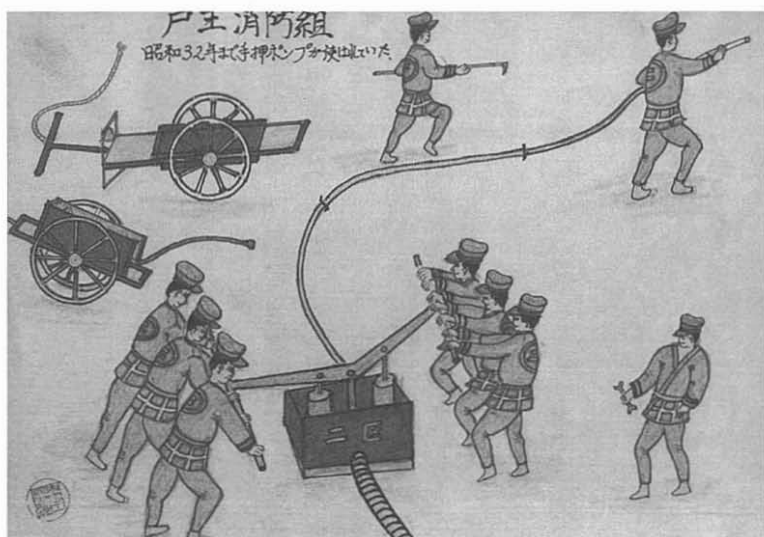
早朝、縁側は泥だらけであった。

当時の農村は、狐、狸と同居していたようなものだった。

厳しくも豊かな農村の暮らしがあった



「ご用心なさい、火の用心」と叫びながら拍子木を叩いて一軒一軒まわった。



組ごとに戸主消防団が組織されていた。当時は手押しポンプだった。

長徳寺焼失

三十八年だったかの三月、三時頃、牛久保の長徳寺が放火で全焼した。

春の強風にあおられ、消防団の必死の消火も水不足でままならず、遠く茅ヶ崎方面に飛び火した。

山内地区、新田地区の消防隊の応援をうけ、夜十二時に鎮火した。

消防団の出た町会では全役員が出て、消防団員への炊き出しや、団員の家を回り着替えを集めて現場で着替えさせた。時間が長く体調を崩してはとの大島町会長の配慮からであったが、八時間の消火活動はさすが、団員も疲れていた。

この年は火災が多く、ホースを干す間もなく鉄塔からはずして出動したこともあった。この頃は、消防署の活動は水利と道が悪く、消防団の可搬式ポンプの独壇場であった。

消防団の歩み

消防団の前身は、全戸主消防であり、部落全員、消防組に属していた。

ハンテン、モモヒキ、ドンブリと言われた腹掛け、活動的ないで立ちであった。

戦争に突入した頃から、消防団に改名され、鉄兜に階級章つきで、黒襟若葉色の洋服になり、黒のバンド、ゲートル、黒の戦闘帽に統一され、訓練行動も軍隊化してきた。ほとんど戦地におもむき、

残った五十代の人が団員になっていた。

若い連中は本土決戦に備え、青年学校在籍のまま召集され、人員不足が極端であった。戦後消防団に改名され、警察から消防署が独立した。

洋服はスフの服のため、洗濯するとだらしなくなってしまう、困った。

当時の消防団は火災消火が絶対的使命であり、火災出動の到着順位と一番放水が各団の誇りと、争っていた。

手押しポンプを修理するのが、新米団員の仕事であり、可搬式ポンプになっても、出動回数が多いため、ポンプ、車の維持管理が大変だった。

特に、ホースの補充には苦労した。

最初の消防車は三十七年頃、日吉消防団から消防三輪車を当時の大島町会長が譲り受けたもので、中川で初めて消防積載車が誕生した。当時は、バッテリーの容量が悪く、管理に団員は大変だった。

鉄塔も日吉から譲り受けて安藤とむと団員の奉仕で建てた。

元の鉄塔は終戦間際、鉄不足のため、大砲軍艦を造るのに強制鉄回収され献納けんのうされたが、倒して裁断したところで終戦になってしまった。

その後、臨時に大島町会長の山から、また、数年して織茂鉄五郎さんの山から杉の柱二本を寄付していただき、火の見やぐらを築いた。

鉄塔のペンキの塗り替えは大変だった。役員は上の方を塗り、一般団員は下から塗るようになっていたため、下の方を作業している者はペンキだらけになってしまった。

屋根の上にながって塗ってくれた団員には感謝している。ずいぶん度胸どきようと勇氣ある人と思う。火災だけでなく、警察の要請で泥棒や脱走兵だつそうへいの搜索などがあつた。

泥棒を追いかけたが、警察が現場に間に合わず、取り巻き逮捕したこともあつた。行方不明者の搜索発見など、有線放送のスピーカーによる情報伝達は野外にいても正確につかめた。

自警団

戦後まもなく食料が不足していた頃、米の盗難が頻繁にあり、部落で自警団を組織して夜警を続けた。

私のところでも忘れはしない。山田神社の祭礼の前夜、倉庫から米三俵とりやカーを盗まれてしまった。朝、気がつかず、お祭りの赤飯を配りに行き、帰ってきたら警察がきているのでびっくりした。

警察が轍の後を追って調べたところ、牛久保に抜け南山田を通り、早瀬川を下り網島までは追跡できたが、諦めました。

その頃青年会の役員会で、夜、農協の二階で会議をしていた時、駐在の警官が「今、勝田方面の蔵に米泥棒が自動車で乗り付け、積み込んでいる。道路妨害に製材所の丸太を出す手伝いをしてくれ」と頼みにきた。

急いで駆けつけ丸太を出しているうちに、犯人の車のライトが見えたので、私たちは夢中で逃げて、物陰で息を潜めて見ていたら、悠然と車から数人降りて丸太を排除している。見張りがピストルを構えて煙草をくゆらしていた。

駐在はどうすることもできなかった。相手は武器を持った多勢、駐在は一人。排除し終えた泥棒の車は走り去った。駐在さんは自転車で、「待て!」とピストルを撃ちながら追いかけていったが、結果は知れたものであった。

一部の人の横暴には警察も手が出せなかった。

有線放送と電話

有線放送と電話は、部落の情報伝達として農協事業の一大革命であった。

各家に電話が通じた時ほど、感謝したことはない。

有線放送は、部落の要所、要所にスピーカーが取り付けられて、緊急情報やお知らせなどが畑や田圃に、また、歩行中でも瞬時に伝わり、非常に喜ばれた。

消防団員には火災発生場所がいち早くわかり、出動の原動力になっていた。市場の情報や中川のニュースも流されていたが、その有線放送も電話の普及により廃止になった。

世の中進んでくると便利になるが、騒音、個人のプライバシー侵害とか問題になってくる。

有線は消えていったが、時代の流れの中では、記憶にとめたい施設であった。

動力線

北山田には動力線は入っていなかった。

戦後、二分の一モーターを使うには電化しなければならず、動力電線を敷かなければならなかった。関東配電の職員が半月くらい、私の家に泊まり込みで作業をしていた。

その当時、今は亡くなられたが南山田の清宮さんが配属されて泊まっていた。私の母のことを、

「おふくろさん」といつも尋ねてきてくれた優しい電気屋さんだった。

電気が引けてもモーターの購入が大変だった。統制物資のため、とうてい購入は不可能だったが、東芝に関係していた方の配慮で、共同で数台購入することにした。ところが極秘に運搬しなければならぬ。そこで三輪車を頼み、荷台にむしろを積んで二人が乗り、千葉方面の工場に取りに行った。今度は積むのが大変。工場の裏手から急いで積み込み、むしろを上掛け、「気をつけて帰って下さい」との声を背に出発したが、統制物資を積んでいるので、荷台に乗っている者は気が気でない。交番の前を通るたびに自然に目がいつてしまい、薄氷を踏む思いであった。

夕方無事、北山田にたどり着いた。

まもなく統制は解除され、モーターは出回った。

電線を引くにも先代の苦労があったことを考えると、今は幸せだと思う。

陸上競技

青年団でよく陸上競技の長距離に出場した。

戦前は長距離競技も団体競技が多かった。

青年学校の競技は壮絶だった。五人一組になり、牛蒡剣、三八式歩兵銃に背嚢を背負い、葉莢をつけ完全装備で十キロを完走せねばならない。一人の落後も許せない競技であった。本科生が何時も出場したが、途中仲間が倒れ、残った四人で倒れた仲間の装備を分担して背負い、とにかく五人揃ってゴールしなければならぬというものだった。

学校の名誉にかけて倒れた仲間を励まし、引きずりながら到着したら、足の爪が全部すり減ってな

くなっていた。ただちに入院したが、血染めの優勝であった。

戦後、港北陸連が活発になり、中山中学で競技が行われていた。

私は一万、五千、千五百メートルにたびたび出場した。

中距離選手で、今の島村尚美県会議員とは懇意にしていた。駅伝、中距離ではいつもご一緒したが、かたや父が県会議員であり、大学生で真っ白いスポーツ運動着、こちらは戦後なのでよれよれのシャツに地下足袋姿、なんとも不似合いな運動会であった。

勝負は負けなかったが、人生双六は負けた。

かたや県会議長、こちらは六十年たつてニュータウンにより財産が半減している。

物質面ではめぐまれていないが、家族の理解がなによりの幸せである。日々の生活を忙しく送ることは、二重の幸せと思う。

駅伝は盛んであった。横浜駅伝、港北駅伝にいつも参加させていただいた。

特に横浜駅伝は各区役所を中継所にして争われた。私はいつも港北区役所から鶴見区役所までが区間であったが、港北はいつも最下位に甘んじていた。

港北区役所でバトンタッチする時、後ろはもちろん誰もおりません。前もかすかに見えるくらいです。途中で肥汲みの牛車に会うと「もう先の選手は〇〇くらい前だよ、頑張れ!!」、と教えてくれた。

港北駅伝は綱島から菊名、小机、中山、中里、市が尾、山内、江田、中川がコースであり、私は江田から綱島までの区間だった。仲間が自転車ばんそうで伴走してくれ、励ましてくれたお陰で中川は上位にいつもいた。

中川駅伝は中川小学校から東山田、野川、馬絹、有馬、江田、中川を結ぶ一周でした。北山田はいつも優勝していた。

青年会の運動会も連続優勝し、他町からうらやましがられた。仕事を終えて夕方から倶楽部で練習

が行われた。強制されずに自発的に出ていたが、責任感が強かったのか、黙々と練習にはげんだ。

長距離練習は、綱島橋の欄干にタッチして帰ってきた。ある人が綱島橋でこれを見て、北山田が勝つわけだと話してくれた。

優勝した時は学校から隊列を組み、優勝旗を先頭に富士若の歌を歌いながら、倶楽部まで凱旋行進をして団結を鼓舞した。

飛びぬけた選手はいなかったが、全員がかばいあい、「俺が」という人がいなかったのが、結束出来た要因と思う。若いうちには、よい経験であった。

とかく集団の中で、「俺は優秀なんだ」と鼓舞する人がいるが、宣伝しなくても世間が認めてくれるのが大事なことだと思った。青年学校、青年団、青年会、戦前、戦後と、頂点からどん底までの経験は、何にも増して宝と思う。

お祭り

お祭りには、青年会が主催で手作りの御神輿を作った。倶楽部に夜集まり、各自作業を分担して製作した。担ぐ台を作る大工仕事ですむと、俵三俵を用意し、中に土とオガクズを混合して詰め、上に四斗の酒樽を乗せ、草鞋で鳳凰を作り、渋団扇で羽を作り、紅白の太い化粧縄で飾り、重い大きな立派なお神輿を、約十日間で作った。

山車も大きな立派なものでした。牛車で引く山車には、笛・太鼓のお囃子が乗り、農道をお神輿の後に続いて練り歩く、のどかな祭りでした。

その当時はお酒はなく、禁制品のドブロクを幹部が苦勞して作り、振る舞ったのです。どこの部

厳しくも豊かな農村の暮らしがあった



中川駅伝競走。自転車の伴走者と息もぴったり。



中川駅伝競走では北山田はいつも優勝し、倶楽部まで凱進行進した。

落でもドブクロ作りは隠していたのですが、密告する人がいて、隣り部落より幹部の方が自転車でき取締調査がありそうなので急ぎ隠すようにと、連絡してくれた。

急いで密造小屋より裏山の墓地に担いで隠した。

でも、小屋には臭いが染み着いているので多少残しておいたら、捜査官が見えて、「他には無いね」と念をおして帰った。

捜査官は「密告があれば捜査しなければならない。物資がない中、我々もつらい。事故がないようお祭りを楽しんで下さい」と別れたと聞く。

連絡してくれた隣り部落では、幹部の方が逮捕され翌日釈放された。

お祭りは山田三部落で揃って盛大に行われた。自分たちが逮捕されても、隣り部落を救ってくれた当時の隣り部落の役員には、感謝致しました。

私らは青年会に入って間がなかったので、夜十一時頃解散して残り少なくなった時、幹部に「酒が足りない、お前、ドブクロを取ってこい」と言われ、一人で山の中のお墓まで一升瓶を下げて取りに行った。周りがお墓で真の闇、心細くてドブクロはなかなか瓶に入らない。暇がかかったが、持ちかえらなければ怒られるし、夢中でドブクロを瓶に入れて届けた。

お神輿を担ぐ者はほとんど酔っぱらいのため難航したが、不思議と怪我は少なかった。一軒づつ回るので、接待に提供されるお酒やドブクロが飲みきれず、役員が車で集めて歩いていった。

警備の消防団も大変であった。泥酔者の保護に追われながら、安全な誘導、お酒所の警備と、よく奉仕していた。

特に、三山田の御神輿が神社参りに行く時は、時間を調整して行かないと御神輿どおし鉢合わせしてしまう。小競り合いしないよう、役員は汗だくで誘導していた。

神輿に田圃などが多少荒らされても、神様のお通りだと黙認されていた。良き時代だった。

山田富士の桜祭り

戦前の山田富士の桜祭りは盛大だった。町内総出で毎年四月八日のお釈迦様の日に行われていた。倶楽部の横、桜の木の下の広場に、大釜二基を備え、甘酒を飲み放題配った。

その当時は子供らの口に甘い菓子などという入らない時代だったので、甘酒は大変なご馳走でした。何杯おかわりしても、怒られなかった。

中庭には椿で飾られたお釈迦様を鎮座し、甘茶を注ぎ、幸せを祈った。

お釈迦様の行事は、伝統行事として現在も行われております。

当時、満開の桜の下では、網島温泉の芸者が三味線を弾き、露店が並び、賑やかな花見でしたが、支那事変勃発により消えた。

戦後、戦地より続々と先輩が復員、青年会が中心になり花祭りが復活した。

前文で述べたが、酪農が町内で始まり、牛乳一日分、出荷をストップして、桜の木の下にヨシズで囲って牛乳風呂を沸かし、女子青年の接待で老人の方に入ってもらいました。あまり牛乳が多すぎで、お年寄りの肌がツルツルになりすぎ、慌てる一幕もありました。

青年会の連日の猛稽古の素人芝居を披露したのも、懐かしい思い出です。

山田富士の西の裾に、権現谷戸という部落がありました。現在の公民館のある場所のところですが、谷戸の奥まったところに権現様という社があり、山田富士の桜祭りとは別にお祭りが行われ、賑やかであったと言われておりました。

権現様は山田神社に合祀され、中宮は現在の公民館に鎮座されております。

演芸

戦後、素人演芸が盛んに行われた。

山田富士の桜祭りに合わせて正午より開始して、夜中過ぎになることもたびたびあった。プログラムが四、五十番はあった。

見物人も若い衆がせっかく練習したのだからと、最後まであまり減らなかった。見る方も律儀だった。

青年会員は必ず演技をやらされた。

八木節の練習は大変だった。茅ヶ崎まで夜、歩きで習いにいった。鼓、笛、鉦の調子合わせには苦労した。教える方も大変な二ヶ月が、寒中続いた。

また、当日が大変。全員女の衣装を借りてこなければならず、日傘を借りるにも他部落まで遠征してかけずりまわったが借りられない者もいて、役員は奔走した。

四月八日の本番（お釈迦様のお祭り）を前に、大雪が降り舞台が全滅してしまい、雪かき、舞台直しに全力をそそいだこともあった。

心豊かな時代がなつかしい。

映画会も夜、小学校校庭でよく開かれた。北山田から山を二つ越さねばならないのだが、隣近所で誘いあい、見に行った。帰りは宮の下を通り、四キロは歩いて家路についた。

娯楽が乏しい時であり、素人演芸や映画会は楽しみであったが、ラジオ、テレビの普及により家庭に情報が氾濫し、自然に消えていった。

厳しくも豊かな農村の暮らしがあった



毎年4月8日の桜祭りには甘酒が振る舞われた。子供たちはこの日を楽しみにしていた。



1日分の牛乳を使ってお年寄りに牛乳風呂のサービス。たいへん喜ばれた。

狐火

青年学校の夜学の帰りは十時頃になった。

仲間がいる時はよいが、週番の時は遅くなり、一人で大善寺のお墓の中を通る相の原（地名）の二キロくらいは、一軒の家もない山の間の原っぱで、男とはいえ気味悪かった。誰か後を付けている錯覚になり、銃剣を握り、夢中で駆け抜けた。

ある時、遅くなり、同志と二人、南山田から堀之内を通り田向屋の地藏様のところまで帰ってきた時、山田富士の前の松山の上に、火の玉が無数に動き出した。

私は呆然として見ているうちに寒気がして、「おい、あれは狐火ではないか」と顔を見合わせてしまった。古老から、狐火が見えた時、狐は足下にいるんだと聞かされていた。狐は煙草が嫌いなので煙草を吸えばいなくなる、と言われたことを思い出し、先輩が隠し持っていた古い煙草に火を付けて吸ったら、煙草にむせて、その方が大変だった。

戦前は動物は多かった。私が小学校の頃、ある夕暮れ、母に明日遠足なので稲荷寿司を作ってやるからと、田向屋に油揚げを買いに行かされた。たしかに買って風呂敷に包んだが、帰ってみたら一枚しかない。途中落としたのではないかと、戻って探してみたが、ない。油揚げは狐の好物である。どこで狐に取られたのか分からないがなくなっていた。

おかげで遠足の稲荷寿司は、煙になってしまった。

故郷が消え、狐、狸、兎などの動物はどこに仮移転したのだろうか。換地になって帰ってくる山も、気難しい人間の公園になり、寂しい。

十五夜

農村の月はきれいだった。空気の汚れはないし、静寂せいじやくそのものであった。

十五夜にはどこの家でも、縁側に机を出し、その上にススキなどの秋の七草を飾り、柿、栗、さつまいもなどを十五個供え、ぼた餅も十五個お皿に盛り供えられていた。

農家で甘い物が食べられるのは、お彼岸、稲の刈り上げなど、限られた時だけだった。だから、健康であり、労働に耐えられたのではないか。

娯楽とてない若い者の悪戯いたづらに、ぼた餅をいかに家の者にさとられず失敬しっけいするかがあった。

二、三名に別れて暗闇くらやみから悟さとられぬよう近づき、縁側の側まで這はいずり、そつと手を出し取ろうとしたら、そこのお爺さんおやが、月見をしている家族に「皆こつちへ来な。お月さんがぼた餅を取りに来なった」と言われ、手を引つ込めることもできず、吹き出してしまった。

思いやりある家族にご馳走ちそうになり、月夜の道をきれいだなあと、駒下駄こまげだを引きずりながら帰路きろについた。

澄む月に 誘いたくなる 田圃道

秋の月 靴音消えて 山に浮き

月に濡れ 落ち葉動かず 空深く

寝苦しき 昨夜車が 狐跳ね

拍子木の 音凍てし夜 火の用心

霜柱 月夜に光り 針を踏む

白き泡 月夜に螢の 露の宿

せせらぎの 音のみ消えぬ 月すみて

夜回りの 足音消えて 寝つかれず

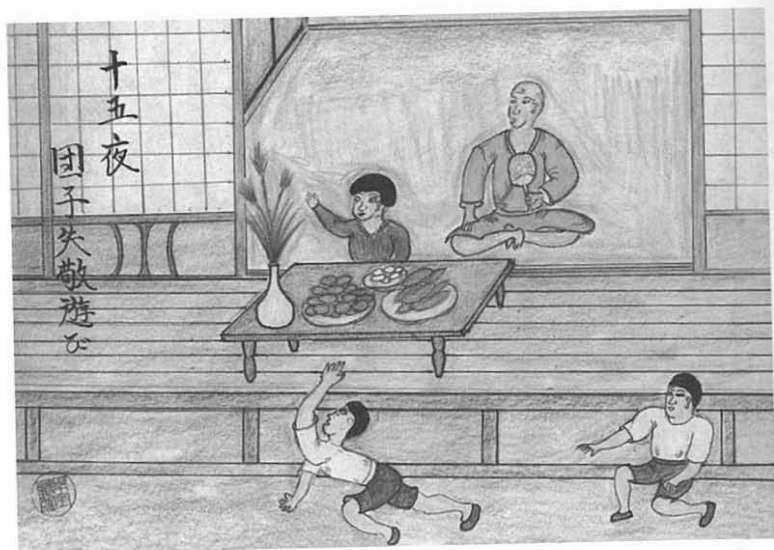
遠吠えに 拍子木合わせ 霜を踏み

無縁仏 弔う現場 芝枯れて

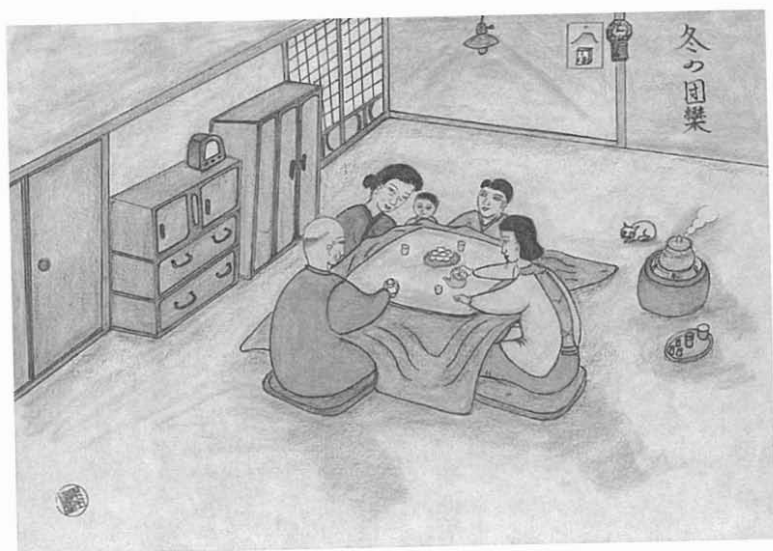
読経に 靴底冷えし 無縁仏

釈迦祭 桜の下で 椿差し

厳しくも豊かな農村の暮らしがあった



家人に気づかれずにぼた餅を取るのも、子供たちの遊びだ。



冬はこたつに集まり、トランプをしたり、おじいさん、おばあさんに昔話をせがんだり、冬ならではの^{だんらん}団楽があった。

嫁入り

嫁を迎える家は、朝早くから隣組、講中の方が大勢手伝いに来て、大変なにぎわいであつた。

昼間でも講中一家の者が提灯を手に、文口から玄関まで二列に並び、嫁を迎えた。休む間もなく、本家の叔母さんが、隣近所に嫁を引き回し、挨拶してから座敷で宴会が始まり、夜中過ぎまで続いた。翌日は、近所の方を招待してお披露目の宴が開かれた。

結婚式の夜は、近所の青年が集まり、振舞酒に酔いしれたが、酒、肴が少ないと悪戯が始まり、若いから力まかせに、お墓の石塔を担いで庭に建てて帰ってしまう。悪戯されないよう、本家役は座敷の采配をしなければならぬし、外の振舞酒の判断と大変だった。

若い衆とすれば、仲間の結婚式を祝うのだが、やつかみが半分で和氣あいあいとして、新郎新婦を茶化し、声援を送り、祝っていた。

三十年代から結婚式場を使うようになり、各家庭では行われなくなった。

嫁入り

夜明け前 提灯をたよりに 御目出度うございます

本日は御日がらも よろしゅうて

あらたまつた挨拶に 何回も頭を下げ

近所の夫婦が嫁入りの手伝いにした

新調の割烹着の叔母さん

賑やかなお勝手 手際良く料理が

おしゃべりの合間に作られ

真新しい半纏の叔父さん

鍬を持つ手に 箒を持つて こまめにお掃除

みんな うきうきしながら

忙しそうに 割烹着と半纏が行き交う

家族は仕事がみつからず オロオロ

髪結い叔母さんが 主役顔で桜湯を飲む

おかあさんは 箆笥の引き出しを開けたり閉めたり

親父は 居場所がなく 玄関を 出たり 入ったり

本家は 手順を朝から何回も確かめている

仲人に介添えされてお嫁さんが到着

三三九度の杯を終えたら

訪問着の 本家の叔母さんが

お嫁さんをつれて 近所に挨拶回り

その後を 子供 おばあさんが ぞろぞろ

当日は 披露宴

翌日は講中広め

翌々日は友人知人

三日間のお祝い 本人は疲労困憊

今は半日で終わる

何でも簡単になった

嫁ぐ朝 仏前永く 春がすみ

露の庭 草履しので 嫁ぐ朝

あの桜 馴染みの顔が 浮かぶ春

思ひ出が 恋し歳なり 松過ぎて

初参り 財布覗いて 何祈る

神殿で 年越し接待 手をこすり

朝露に 歯切れ良き鎌 眠気醒め

厳しくも豊かな農村の暮らしがあった



雨の日、お三時を届ける新妻。



農家の主婦は家事、育児、農作業と休む暇がない。畑で授乳する主婦。

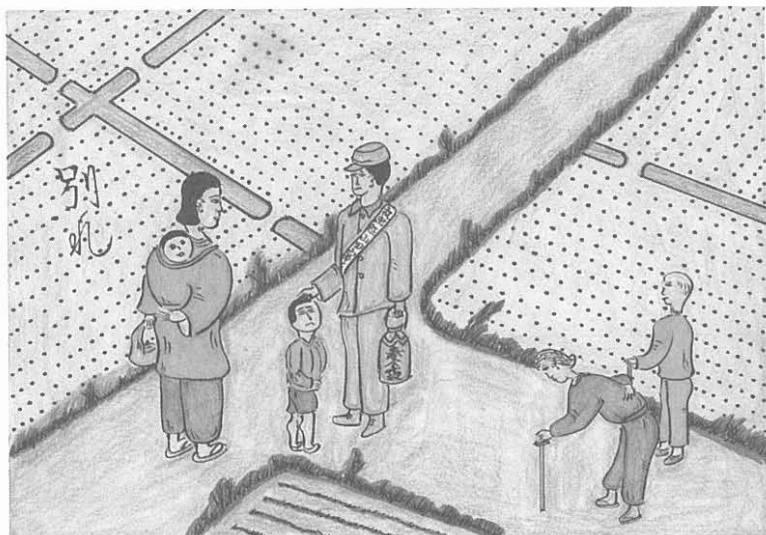


お勝手も大切な仕事。赤ん坊をおんぶして食事を作る。



主婦の楽しみのひとつに、盆、正月の里帰りがある。やっと実家に着いても、嫁ぎ先に悪いからと一泊もしないで帰されることもしばしばだった。

戦争が暮らしを変えた



戦争が始まると、村の辻々で家族と別れる若者の姿が見られた。

昭和初期

昭和初期、世の中が激動の中に入りつつあった。軍人が台頭してきた時代であり、警察も兵隊さんには手が出せなかった。バスも電車も軍人は無鑑札、子供には憧れの職業であった。

物心ついた頃、よくおじいさんに山田館に連れていつてもらった。山田館は東山田のちめ通りにあり、広さは小さい体育館くらいで、両脇に二階の棧敷席、その下に駄菓子屋が店を出していた。

その当時の中川ではただ一つの劇場で、大勢集まれる建物は山田館だけであった。

有名な浪曲師、漫才、講談、手品師、映画、芝居などを盛んに上演したが、興業間近になると、今のバス通りの砂利道に宣伝の大きな立幟が、ちようと、相撲の場所に飾られる幟と同じように立ち並んだ。老若男女とわず、娯楽が何も無かった時代だったので、ただ一つの社交場であった。

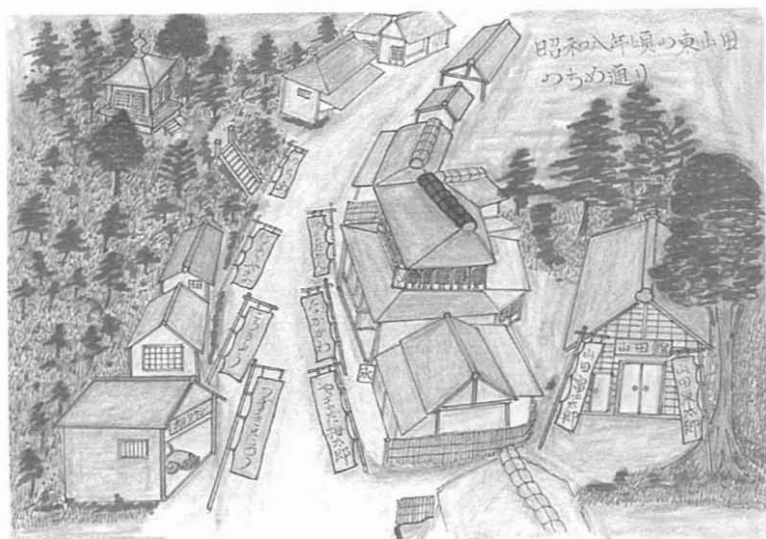
私は芝居を見るより駄菓子屋から届けられるお菓子が目あてだったので、食べれば帰りたくなくなり祖父を困らせた。

山田館の前にタクシー会社があつて、祖父と一緒に行けばいつも往復乗れた。当時とすれば何より車に乗れるのが楽しみであった。若い人たちも、けっこう恋が結ばれたと聞く。

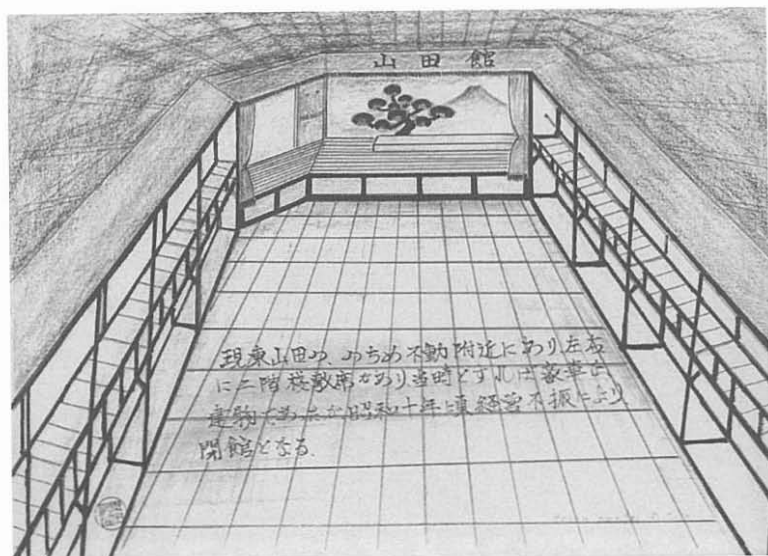
その山田館も、経営のまずさから閉館になり、建物は溝の口の軍需工場に移築され、終戦後解体された。タクシーの車庫も身売りに出され、この車庫は重代谷戸の共同出荷小屋として譲り受けた。

元の私宅の下に移動設置されたが、東山田から運ぶのに建物をそのまま牛車に積み、人間が引いたり押したりして、狭い道を谷戸中総出で運んできた。

自動車は珍しいのどかな時代だから運べたが、今ではとても考えられません。



中原街道の東山田に、のちめ通りと呼ばれた商店街が戦前まであった。



のちめ通りには山田館という興業館があり、映画や寄席をやっていた。

移築後は部落中が総出で壁を塗り、屋根を葺き、完成させた。今では考えられませんが、皆奉仕でした。今は時間で賃金が換算され、物資は豊かだが、親睦人情は貧困になった。

北山田は竹の子の産地であった。共同小屋に朝、集荷され、トラック(今の二トシ車)が運搬にきた。なにせ、道が狭く悪いので大変だった。

朝まだ暗いうちに竹藪に入り、夜明けを待つて掘り始めないと集荷に間に合わない。朝掘りの竹の子"というので、市場では評判がよく、少しでも値売りするため、竹の子に限らず、農家は夜星をおおぎ、朝露を踏み働いた。

山田富士の赤松、皇居へ

昭和13年頃だったか、山田富士の頂上付近にあった樹形の良い大きな赤松が皇居の広場に移植された。陸軍の観兵式の時、天皇陛下が閲兵をうけられる観閲台後方のバックの松として植えられました。現在もあるそうで、一度訪ねたいと思いますが、当時の人は誰もおりませんので、なかなかわかりません。

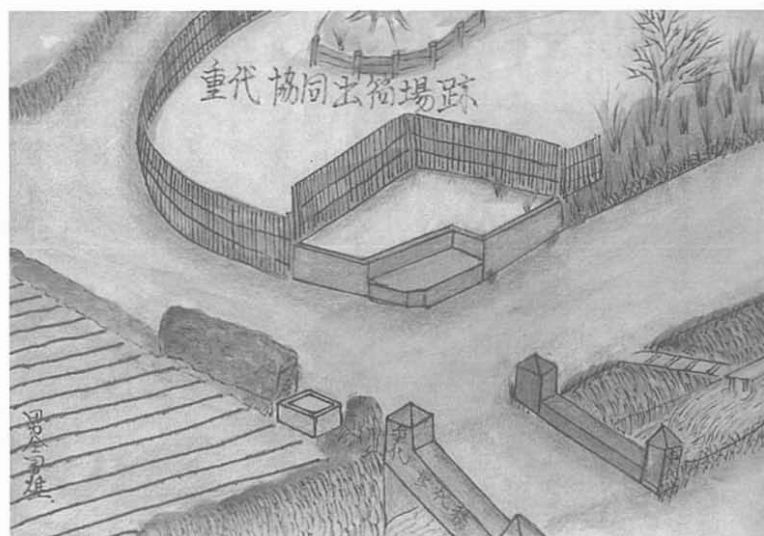
移植する前年、根回しをし、大麦を掘った穴に埋め戻し、翌年、移植にかかりました。

頂上から道まで降ろすのは大変でした。途中の桜の木は邪魔になるのは全部切られ、かぐらさんという道具で時間をかけて降ろし、車に積むのに今のように機械はなく、全部、人夫の機敏な動作で積まれました。

作業中も天皇陛下の背景の松ということで駐在の警官が立ち会い、車には松の根株に宮内庁御用と書かれた看板が立てられ、道中、松が通るのに邪魔になる枝、電線は天皇の松が通るといので問答無



中川の竹の子は味がいいと評判で、市場にさかんに出荷された。



重代、今の北山田交差点あたりの地名だが、そこに協同出荷場があった。

用で切られ、今のバス通りを荏田にぬけ、二四六(大山街道)を溝の口を経て、二子橋を渡り、皇居まで運ばれたと聞きます。

地元は大変でした。役員が出発の時、松を見送っておりまして。

今でも頂上から降ろす途中の桜が小さいのはその後植えられたためです。

青年会も皇居前に整地作業に奉仕されました。

東京見学

小学校に上がる前年、父が「男の子は軍人になれ、そして国の為に殉ずる人になれ」と、社会見学として東京に叔母さんと一緒に連れていってくれた。皇居、近衛師団、靖国神社、明治神宮と強行軍だった。初めて見る都会と乗り物に酔い、すっかりくたびれてしまい、見学どころではなかった。

ただし近衛師団は今でもはつきり記憶にある。衛門をくぐり、兵舎の角までくると、疾風のように騎兵が二頭駆け去っていった。「かっこいいなあ」と子供心に思った。兵舎の中に入ると階段を二、三名の兵士が駆け下りてきて、階段の途中で敬礼されたのでびっくりした。それもそのはず、父は教育召集で三カ月入隊していたそうです。現役除隊後、兵器の進歩が激しいので時々召集して新兵器の実習訓練が行われるのが教育召集だそうです。

兵隊さんの案内で、酒保に行きご馳走になったが、その当時は貴重品だった腕時計がたくさん並んで売られているのが印象的だった。

今では時計は使い捨ての時代、ずい分か変わったものだ。

皇居も靖国神社も幼い私には長い砂利道を歩かされた記憶が強く、乗りつけない車と、田舎者ゆえ

ガソリンの匂いに酔ってしまい、見学どころではなかった。
代々木の原で風上げに興ずる子供たちをぼんやり見つめ、なぜ皆気持ちが悪くならないのだろうかと思つて、早く帰ることしか考えていなかった。

小学校

やっと小学校に入學しましたが、学校も軍事色が強くなり、先輩後輩の差が厳しく、特に高等科の週番は下級生には恐れられる存在だった。週番は赤白の縦縞のたすきをかけ、校内にらみをきかせていた。掃除当番の時は週番の検査を受け、バスしなければ何回でもやりなおしさせられた。

先生も週番には一目おいていた。だが低学年（一・二年生）には親切だった。朝の自習時間には手を取って教えてくれた。なにかにつけ面倒みがよかった。朝の朝礼には全校整列し、週番の指揮で奉安殿を遙拝、ラッパ手（高等二年）の吹奏により、国旗掲揚がかかさず行われた。

三年頃より校庭も青年学校の教練の日課が増え、軍事訓練に使われる日が多くなった。軍隊出の小学校の先生も多くなり、青年学校の教練指導員を兼任することが度重なり、その都度、小学校は自習が増えてきた。学校の窓から見える先生の軍服姿を誇らしく思つた時代だった。

学校の帰りに、友達とお寺の屋根にスズメの巣を取ろうと、梯子を寺から無断借用して本堂の屋根に登った。登り終えたら住職に見つかり、梯子を取られて下りるに下りられず、さんざん叱られ、屋根の上から泣きながらあやまった。やっと梯子をかけてもらい、地上に下りたとたんかばんを背負い駆け出し、住職に悪口暴言を言うなんとも悪い子供でした。

忘れ物をする、必ず家まで取りに行かされた。往復6キロ、駆け足でも授業は終わってしまい

ます。手拭いを忘れても家までの往復です。

鎮守様の祭礼には、部落出身の児童だけ学校で参加しました。神社に整列し、式典が終わるとお供え物の菓子をいただきますが、その部落の生徒は授業が休みになります。お供え物は紅白の丸い和菓子でした。

四・五年になる頃から奉仕活動が多くなりました。応召家庭の草むしり、麦踏みなどです。六年になると大戦に突入、俄然、教育は様変わりしました。連戦連勝、神国日本は絶対負けぬ国と教育され、信じておりました。学校前の田圃で暗渠排水工事が行われ、児童も動員されました。資材が無いので溝の中に松葉を敷き詰め、その上に竹の束を置き、その上にまた松葉を厚く敷いて踏み固め、埋め戻しの土を踏み固めるのが児童の仕事でした。寒い日は大変でした。長靴を持っている者はほとんどなく素足で、手袋は無く、満州の兵隊さんを思へばと、励まされました。

教科書は新学期が始まって新しい本はなく、上級生の古本で勉強したが、古本があれば良い方で、隣と二人で共用した者が多かった。鉛筆も貴重品で短くなって握れない鉛筆は竹の節穴に通して使い、帳面もなるべく小さい字で書き、終わったら無駄に使わなかったかと先生に、また親にも見てもらい、やっと新しい帳面が買えた。書道(書き方)の時間には半紙はもちろん無く、新聞紙を使用した。が、当時は新聞を購読している家はあまりなく、貴重な教材であった。

学校鞆の補充はなく、鞆を背負っている子も使い古しの修理した鞆で、大半は風呂敷包みで通学、履き物はズック靴を履いている子はまれであり、ほとんど藁草履であった。学校帰りの途中で、草履が切れて素足で冬の霜解けの畦道を泣きながら帰ったのを思い出す。

家に帰ると野菜の出荷の手伝い、脱穀、水汲み、風呂焚きと、必ず仕事が待っていた。帰りが遅くなると父親から叱られ、鞆を投げ出し夢中で働いた。

宿題や自習をする時、風呂に接近しすぎて頭の毛を焼いてしまったことがたびあった。夜自習するにも、電気は節約で、二燭の電球ではうす暗く、秋の満月に姉が「月夜の方がよく見えるよ」と

言ったことが思い出される。

今さらながら時代の流れを感じ、また訪れるであろう貧困、物資不足に心しなければと、きれいに澄んだ夜空を懐かしく思い出している。

高等科から青年学校

一年一学期が終わらぬうちに先生は召集され、自習が続いた。

先生は次々戦地におもむき補充がつかず、その上、学校は軍隊に占領され、生徒は各公民館、神社、お寺に分散授業が行われた。教科書、帳面、鉛筆、食糧不足がせまり、弁当を持って来れない生徒がだんだん増え、さつまいもを持つてくる者は良い方だった。

家庭も手不足になり、学校に赤ちゃんを背負い勉強に来る生徒が増えた。

今思うと、日本全国の生徒は、おしんがだったと思う。

その当時の教育は耐えることを一番学んだと思う。それが今日まで、いや一生続くだろう。

学校ははじめ重機関銃部隊が入り、一階部分は床をはがし倉庫になり、他には兵隊が入った。校庭は馬小屋になり、完全な兵隊屋敷になった。

ほとんどの召集老兵で、今思えばかわいそうだった。将校も不足が目立ち、自分の子供みたいな学徒即席将校に往復ピントをくい、訓練に明け暮れていた。

ちょうどその頃、中川青年学校は銃剣術では県下一を誇る優秀校だった。防具も百五十セットを保有、一年は木銃、二年は模擬銃、三年は模擬銃と牛蒡剣、四年は三八式歩兵銃、牛蒡剣、葉莢、訓練により背囊を背負い、装備も県下では右にでる学校はなかった。

召集兵と青年学校生徒と銃剣術の試合が校庭で行われたが、親子みたいな取り組みでは結果はわかったようなものであった。

みじめな老兵は気合いも入らず、生意気な即席学生将校には腹が立った。

学校に戦車隊

そうこうしているうちに、小学校の兵舎は関東軍の戦車隊に交代した。満州から本土防衛に引き上げてきた、これは優秀な軍隊であった。歳をきいたら、まだ十七歳の少年戦車兵も多く含まれていた。後から送られてくる戦車を格納する^{かくのう}ため、山の北側に戦車壕^{せんしやごう}を地元も手伝って数知れず掘った。

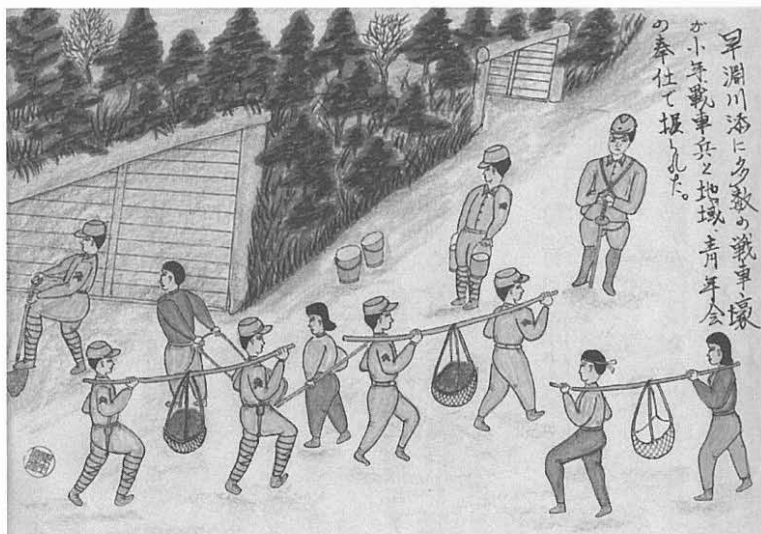
中川小学校前の早淵川^{かんじやう}ぞいの山根に、茅ヶ崎方面まで戦車が一台入る大きさに掘り、壕内は杉、松を伐採し、頑丈^{がんじやう}に組み立てた。

もちろん国のためということで山主にはかまわず資材は調達できた。戦車服が破れても縫う糸もなく、ボロボロの姿で働く少年兵の生真面目な顔が忘れられない。

昼食時、私どもは農家なので多少食糧には余裕があった。弁当箱に箸^{はし}をつけようとすると、少年兵たちは食べ終わっている。それもそのはず、飯ごうの蓋^{ふた}一杯の雑炊^{ぞうすい}きりない。食べ盛りの兵隊はかわいそうだった。弁当を分けて上げようとすると、上官の監視^{かんし}が厳しく、「ハッ、けっこうであります」とひもじさをたえ、辞退^{じたい}する目に、国のためとはいえ、あわれさを感じた。

作業後、兵隊は明日の仕事準備のため、山へモッコを作る材料として藤蔓^{ふじづる}を取りに、夕暮れまで仕事をしていた。

そのかいもなく、戦車は一台も来なかった。朝鮮海峡^{ちやうせんかいきやう}を渡る時、撃沈^{げきせん}されてしまったと聞く。



戦車を格納する戦車壕が、早淵川沿いの山際に無数に掘られた。



昭和19年頃、ガソリンもなくなり、松の根から油をとった。

松根油掘りしょうこんゆ

十九年頃になるとガソリンはほとんどなくなつた。松の根を掘りおこし、燃やし油を取る作業が動員されて行われた。

ガソリンは血の一滴いってきの合い言葉で、大きな根を掘り、牛車に積むのが大騒ぎ、重いのでテコを頼りに積むが、一日かかったこともある。今はユニツクがあるので簡単だが、能率は悪かつた。

でも、特攻隊が使うガソリンもないというので、夢中で掘つた。たしか一日作業しても、五升しょうはとれなかつたと思う。

勝田橋手前百メートル山田よりの左側に、陸軍松根油隊がおり、大柵公民館西側に海軍松根油隊があつたが、間にあわなかつたと思う。

青年学校の靖国神社参拝

青年学校全生徒が女性徒を含めて、歩きで九段さんばいに参拝した。

男子は制服で一年は徒手としゆ、二年は模擬銃、三年は牛蒡剣と銃、四年は完全武装、女子は黒のモンペに黒の上着、学校から川崎宮前を通り、溝の口、二子橋、渋谷をへて皇居、靖国神社、明治神宮を参拝して帰路に着く。

ところが二子橋まで帰つてくると、夜学に間に合わぬことになり、男子のみ全員駆け足の号令がかかり、学校まで駆け続けた。幸い私はマラソンが得意だったので、苦労には思わなかった。だんだんと夜学も、勉強の時間に銃剣術が入り、訓練が日増しに多くなった。

助教訓練

じよきようくんれん

二十年になると青年学校の教官が次々招集され、訓練をする指導員が不足してきたため、県下の学校から三名づつ助教訓練に本木の神奈川県鎌成道場に入れられた。もちろん、完全武装で綱島まで歩き、東横線に乗りうとしたら「ご苦勞様です」と駅員に言われ、無料だった。ようやく本木に着いたら、八聖殿の側だった。

宿舎の前は海で、松並木が海岸にあり景色のよい所だが、毎日朝飯前に海岸に一列に並び、海にむかって号令訓練、いくら大きな声をだしても相手が海ではかなわない。

食事は飯ごうの蓋一杯のスイトン、三食とも腹がへつてたまらなかつた。

近所の生徒が、夜中に家に帰り薩摩芋を取つてくると密かに宿舎を出た。早く帰ればよいがと心配していたら、帰らぬうちに抜き打ちの非常呼集点呼があり、一名足らぬと、大変なさわぎになってしまった。全員で海岸を搜索させられたが、中には海軍の無線隊の中まで入り大目玉をくった。そのはず、無線隊には女子隊員が多いので、夜中ではまずかつた。騒ぎが収まったころ薩摩芋を抱えて生徒が帰ってきた。相談の結果、薩摩芋を全部士官室へ提出することにして、本人が士官室から出るのを待ったら、笑顔で帰ってきた。「ご苦勞」と言われ、叱られなかつたようだった。

だが、腹はへりっぱなし、芋がうらめしかった。夜中隠し持っていたアラレを布団をかぶり、音を

たてないようにして食べた。時折、港にはいる病院船が海上を通ると全員浜辺に整列、御苦勞様ということで捧げ銃で迎えた。

助教訓練を終えて帰る時、近所の農家へ預けて隠し持っていたお米で、飯ごう一杯の醤油飯を炊いて貰い帰路に着く。網島駅を降り、徒歩で堤防を歩き、吉田橋まできたので、炊いてもらった飯にしよう、空腹なため土手に銃を投げ出した。三人で久しぶりに食べるお米のご飯を夢中で食べていると、「コラッ」と大声、誰かと振り返ると、校長が自転車を下りて髪をふるわしてカンカンになって怒っている。「しまった」、又銃してなかったのだ。

銃は決して寝かせてはならぬと訓練されている。銃には菊の紋章がついているので、粗末にあつかつてはならぬのだ。食べかけの飯ごうをしまい、堤防の上でさんざんお小言を頂戴し、やっと許され学校に帰り、教頭に報告、暗くなつてから帰路につく。

次の訓練日に学校に行つたら、同級生が、私たち助教訓練に行つた者を除いて全員二等兵の襟章をつけていた。びっくりして聞いたところ、留守中、徴兵検査もしないまま、防衛召集令状がきて、都田小学校に入隊したとのこと。本土決戦に備え、戦闘要員として動員され、敵前上陸があつた場合、非常召集するまで自宅待機となり、即日除隊。それで学校にきたとのことであつた。二十年四月、ずいぶんゆきづまったものだ。徴兵検査する間もなかったのだ。

がしかし、困つたことがおこつた。クラスを二つに分け、二小隊の編成になつていた。ところが助教訓練に行つた者は、防衛召集が来なかつたので、襟章がなく、学校では号令をかける立場だつたのですが、悲しいかな誰も言うことをきかない。困つた指導員が、学校では学校の規律を守れと説得、ようやく訓練が開始された思い出があります。襟章の權威はその後何かにつけ続いた。

軍事訓練は厳しくなるばかりであつた。今の中学の丘から早瀬川までの田圃道を、銃を両手で支え、川まで葡萄(腹這い)前進、時折、教練指導員に腰が高いと木銃で尻をたたかれ、堤防まで着いた時は、服は泥だらけ、ボタンははずれているし、さんざんだつた。

夜間訓練の時、星もない真つ暗な夜、歩哨の前をクラス全員音がでないよう牛蒡剣には布を巻き、歩哨の二メートル手前を葡萄匍して通ったら、半分通過するまでわからなかった。歩哨の責任重大性が感じられた。

よく山田の富士山が演習場として使われ、周りの丘から攻撃を開始、田圃を這い、カーバイトの模擬機関銃の援護で山頂に突撃、占拠のくりかえしが行われた。三、四年生がおもだった。

査問は厳しかった。年一回、港北区の青年学校が一同に会して関東軍司令部の軍事訓練の査問をうけなければならぬ。今の港北土木事務所付近の河川敷でよく行われた。

各学校とも名誉にかけて日頃の訓練の成果を披露するので、緊張の連続であつた。

ちょうど、査問中、戦闘機が一機現れ、山裾の農家に急降下を始めた。近くの生徒に聞くと、少年航空兵の家と聞きました。再三翼を振って南の空に消えた。おそろく最後の別れだったろう、悲しい思い出だった。

暁天動員

本土決戦に備え、残り少ない在郷軍人を中心に、毎月一日、十五日、竹槍を持って小学校に朝五時に集合、刺殺訓練が行われた。竹槍は穂先を鋭利にとがらし、油を塗り焼いて作った。

今思うと、幼稚なことをしていたと思うが、その当時は真剣だった。

軍隊も武器がなく六二部隊でも銃剣も中身だけで鞘がなく、竹で鞘を作っていた兵隊を見かけた。暁天動員も、みな戦地に行っているので青年学校生徒が多く、健康上徴兵もれの人为主体で行われた。

婦人特攻隊

戦局も重大な局面を迎え、沖縄が戦場になり、本土決戦も決定的になった。軍では、海岸線で阻止するため、最後の手段として女子特攻隊を組織した。

これは、あくまでも秘密に結成され、菊水のマークが旗印だったと思う。

北山田にも、複数の女子隊員が極秘におられたと記憶している。

隊員は、海岸線に人間一人入れるたこつば式の壕を掘り、戦車爆雷を抱いて潜み、戦車が上陸してきたら、爆雷を抱えてキヤタピラの下に飛び込み爆破させる特攻隊で、もちろん、我が身も吹っ飛んでしまいます。

これは戦場では命令により盛んに行われたことですが、内地では、幸い実施されなくてよかったと思います。

今さらながら平和の尊さを感じます。

送別会

徴兵検査を受け、続々青年会先輩が出征していった。

富士山倶楽部で送別会を開いたが、灯火管制で電球に黒い布をかぶせ、ほとんどロウソクの明かり

くらいしがなく、配給はいきゅうのわずかなお酒と、薩摩芋さつまいもを輪切りにして焼いたのと、芋キントンで軍歌を歌い、会員全部で励まし、俺たちも後から行くからと別れを惜しんだ。

翌日、倶楽部で町内全員壮行会を開き、町境まで送り出した。出征兵はかならず途中で山田富士を振り返り、いつまでも見つめていた。

そして、たいがいの人、二度と帰らなかった。

心では今一度と思つたであろうが、覚悟して行く身には、女々しい態度は取れぬと、大勢のなか家族にも素知らぬ振りで、別れていった。周囲がなければ存分ぜんぶん家族に言葉もかけられただろうに、と察した。

でも、まだ壮行会ができた方はよかった。終戦間際は、入隊するにも、壮行会は禁止、送っていくには付き添い一名だけ、それも出かけるには、夜中密ひそかに出かけ入隊すること、また部隊手前五百メートルで付き添いは禁止、という処置しよちがとられた。

そんな思いをして勇躍ゆうやく日本の防人さむもりとして軍務ぐんむについた青年は、ほとんど南方海上で撃沈げきちんされ、海の藻屑もくすと化した。

戦わずして二十の青春を散らした思いは、いかばかりであろう。

戦没者の合同葬儀

中川地区から二百数十名の戦死者をだした。

最初は遺骨遺品いこつ いひんが現隊げんたいから届いたが、戦況が進まぬ頃から遺骨すら無かつた。

一番最初に無言の帰還きかんをされたのは、北山田の田向屋の主人小泉一郎さんでした。支那事変しなじへん当初の

犠牲者で、部落総出で市境の野川まで、夕方、遺骨の出迎えに行きました。市境まで現隊の兵隊さんが付き添ってこれ、暗闇の静寂の中、父が吹くラッパの国の鎮めのもの悲しい吹奏は今でも耳にあります。

中川地区八カ町村での戦死者の合同慰霊祭が、中川小学校校庭でたびたび行われましたが、戦死者が多く、空襲も激しく、大勢集まることは危険になり、各町で行われるようになりました。

青年学校四年生は、遺骨の出迎え、葬儀と、小銃着剣で警護を担当しながら、何時か俺も迎えて貰う立場になるのかと、祭壇の写真を見ながら同志と語り合っていた。

最初の頃はそれらしく告別式ができたが、終戦間際は遺骨はなく、遺髪さえ届くことはなかった。

何処でどのように戦死したのか、敗戦色濃くなっていた当時はわからなかった。軍から位牌の引き取りも二名程度に制約され、細々と告別式が行われるはめになってしまった。

毎年お盆になると、異郷の戦野で誰にも看取られず、家族を思い、望郷の念強く、息を引き取った方々に南無阿弥陀仏を唱えずにはいられない。

望郷

大東亜共栄圏建設

召集令状を手にして

祖国防衛の先兵と唄われ

妻子を残して前線へ

鼻毛も凍る酷寒の大陸で深夜北極星を探して家族を案じ

鉄兜も焼きつく炎熱の東南アジアで眠れぬ夜

南十字星の下で祖国を案じ

星空の屋根の下 銃を抱いて見る夢は……

カサカサと奏でる雑木林の舞う落ち葉
スミレ、タンポポに誘われ
春一番の桜吹雪

田湯沸く炎暑に豊作の大山参り

釣瓶落としの落日に

収穫に寸暇を惜しんだ日々

最愛の妻や子は

頑固な親父は

慈しみ溢れるおふくろの元に

帰りたい

帰れない

帰還命令がでるまでは

夢半ばで非常召集

星が涙ぐんでいた

今日も戦友が九段の靖国に帰っていった

明日は我が身と

いや、俺は帰る

家族の待つ日本へどんな思いをしても

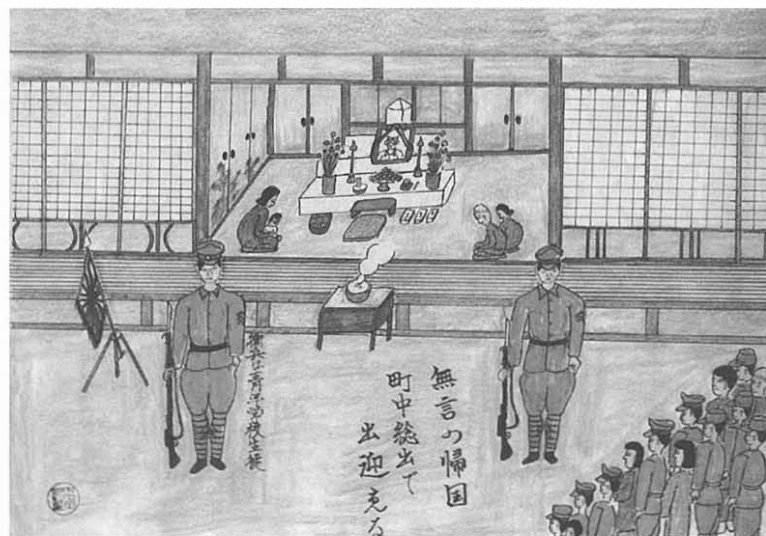
海を泳いで

汚泥を這っても

帰りたい



虎は千里走って千里帰るといういわれから、寅年生まれの女性に年の数だけ結び目を作ってもらう千人針がお守りとして送られた。



戦地に行った兵士は無言の帰国が多かった。

征く前夜 一人田起こす 月明かり

師走夜 妻千人針を 小走りに

征く前夜 黙くする妻子 氷雨泣き

壮行会 襟巻き深く 送る妻

蛙声 奉公袋を 握りしめ

蒸し暑き 軍歌遠のき 妻うつろ

盆の夜 吏員公報 言葉なく(戦死公報)

穂出し前 明日征く兵士 暗き田に

照空隊と高射砲隊

今の山田小学校の近所に照空隊陣地^{しょうくうたいじんち}があり、準工業地区に海軍倉庫があった。照空隊陣地構築によく青年団で奉仕にいった。道中坂を学校方面に五十メートル登った右側に、大きな防空壕があり、そ

の中にトラックをいれ、後輪を浮かし動かぬようセットし、エンジンをかけて車輪で発電し、夜の守りをしていた。牛久保の原にもあり、よく兵隊が連絡に私宅の庭を通った。

高田の小学校の近くに高射砲陣地があり、ずいぶん命拾いした。B 29の夜間爆撃の時、あまりの低空のため撃った砲弾が耳元をかすめ、百メートル裏の竹藪で爆発、よくも無事だったと今でも思う。

空襲の最中に外に出ては危険なのだが、夜間爆撃の照明弾とサーチライト、曳光弾の交差がきれいなので、父と姉三人で、原の柿の木の根元で見ていたときのことだった。

よく陣地の兵隊がお酒の証明書をもらいにきた。その頃、父が町会の事務所をあずかっていたので、証明書の発行をまかされていた。祝いごと、壮行会などだったと思う。

照空隊の兵隊が戦後二、三名地元にとどまった。

空襲

最初に敵機を見たのは、警戒警報中にいきなり北山田の上の方から山すれすれの低空で、高田方面へグラマンが地上をはっていった時だ。いきなり目の前をものすごい爆音で駆けぬけたのには、私もどぎもをぬかれた。高田の高射砲ははずすためと、後でわかりました。

秋の彼岸にお墓の線香立て作業をしていた時だった。艦載機が吉田橋付近の工場を攻撃していたが、まぐれた敵機が飛来し、頭上で物体を落とした。新型爆弾と思い、畦にへばりつき、爆発を待ったがなかなか爆発しない。それもそのはず、艦載機の補助タンクだった。

五月二十九日の横浜大空襲は焼ける煙で太陽が隠れ、日蝕が続いているようだった。その煙の中を、ゆうゆうとB 29が手が届くかと思われる低空で、よくもこんなに飛行機があるかと思うくらい、



空襲が多くなり、裏山に防空壕を掘って避難した。



空襲のない時は、隣近所で消火訓練をして空襲に備えた。

我がもの顔に飛んでいた。ニュースを聞かなくても横浜全滅が黒煙でわかった。

そして幾日かたつて、私は磯子の競馬場へ馬の検査に行った。地図を頼りに馬に乗り、朝暗いうちに出かけ、ようやく競馬場に着的いた。焼け野原のため、目標になるものがなく、空襲になったら駆け込む場所がないので心配したが、往きは無事だった。

検査を終え、早く帰ろうと思ひ競馬場を出たとたん、空襲になり、急いで山の崖下に飛び込んだが、その山の上に高射砲陣地があり、突然砲撃を開始した。驚いた馬は崖下から道路に飛び出して猛烈に駆け出し、ようやくなだめ、避難場所を探してことなきをえた。焼け野原の市中に來ると、とつときの戦車が三台、地響きをたてて、移動していた。おそらく本土上陸に備えて、空襲の合間の移動だろう。家に夕方やつとたどり着いて、横浜は海まで何もなくて見えるほど焼け野原だと、夕飯を食べながら話した。

北山田が焼夷弾で火の海になったのは、それから間もなくだった。

東山田の準工業地区が一部かかっているが、そこに海軍倉庫が幾棟かあった。陸軍の照空隊とともに並んであったため、攻撃目標になり、夜、山田富士の周辺の重代辺りから焼夷弾が落とされ、田圃も山も真つ赤に燃えあがつてしまった。

空は照明弾が投下され、高射砲の炸裂、破片がバラバラ落ちて、電波妨害のアルミのテープもカサカサと落ちてくるのが、昼間のように見えた。私は鉄兜をかぶり、夢中で本家の方へ走つたら、もう本家の周りは火の海で、叔父さんが大声で「誰か来てくれ」と、どなっているのが真つ赤な中に影絵のように浮き出ていたが、落下物が多く立ちすくんでしまった。

すると、神無谷戸方面から、ものすごい火の手が上がり、ついに農家に被害が出たらしく、待機していた警防団が手押しポンプを引いて神無坂を途中まで駆け上がつて行つた。今度は稲荷谷戸方面の住宅から火の手が上がり、坂の途中で迷つていたが応援の警防団が続々駆けつけてきた。地元の者は自分の家に落ちてくる焼夷弾を防ぐのが精一杯だった。ほとんどの家では、草屋根を突き抜け、床の

間に、廊下に落ちたが、初期消火が早く助かった。働き盛りの人はいなく、女老人子供が多かった。神無谷戸の農家はご主人は六二部隊(馬絹)に入隊されており、「山田方面が相当やられているな、家は大丈夫かなと、煙がよく見えたので心配だった」と翌日全焼の一報が部隊に入り、整理に二、三日休暇で帰られて話された。

その家は焼夷弾が本体の状態で二十四本束ねたまま台所に落ちてしまい、手の施しようがなかったようです。もう一方の家も手の打ちようもなく、また、貴重な農機具の発動機の燃料が格納してあったため、それに火が着き爆発を起こし、もの凄い黒煙を吹き上げ、たちまち全焼してしまつた。

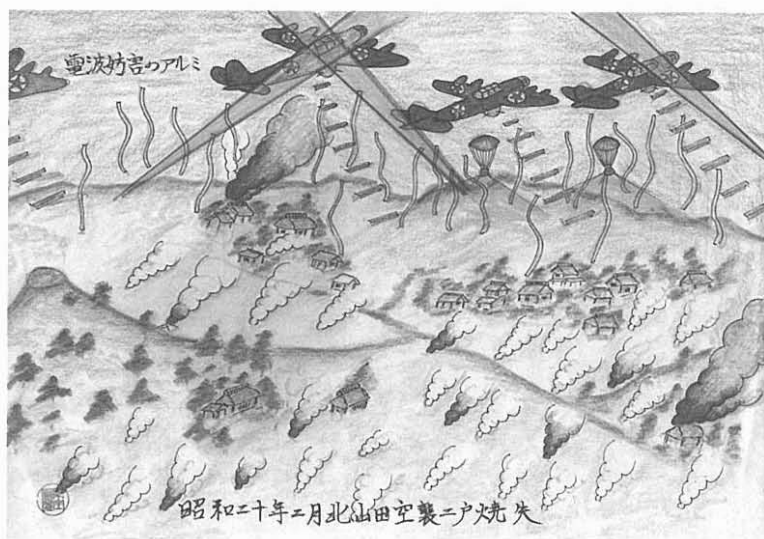
海軍倉庫も全滅、防空部隊も狂つたように応戦していたが、弾がつきたか、破壊されたか、沈黙していた。後日、焼夷弾のカラ、不発弾をひろい集めたら、一メートル五十センチの高さに三十メートルくらいあつた。とにかく夜の空襲はきれいだった。サーチライト、曳光弾、照明弾、砲弾の炸裂、燃え盛る炎、威圧するB 29の巨体、言葉には言いつくせない様相で、二度と遭遇したくない。

十九年頃、青年会、馬引組合などで、田奈部隊(今のこどもの国)へ勤労奉仕に行つた。田奈部隊は陸軍の弾薬庫であり、全面積の山は地下弾薬庫になつていた。

今の鉄道は弾薬輸送鉄道で、入口の所に衛兵所があり、警備が厳しく、また、駅のホームには砲弾が薪を積み上げたようにぎつしり並んでいた。地下庫には幾重にも両側に棚を作り、砲弾爆弾が並べられ、不気味であつた。その中でたびたび空襲があり、奉仕員は山の中に隠れたが、山の下は弾薬庫で、爆撃されれば跡形もなく吹っ飛んでしまうだろうとあきらめていた。

B 29の編隊に迎撃する防空部隊、とつておきの戦闘機がいくら撃つても落ちない敵機に猛然と体当たりし、火だるまになって落ちていくのを目の当たりに見た。帝都防衛の責任感から我が身を捨てて、落ちぬB 29に弾も使い果たし、やむにやまれず弾となつて散つていつた戦闘機を何機も見た。

それでもB 29は、やたらに落ちなかった。狙われるはずの田奈部隊は一回も爆撃されなかった。終戦後聞いたが、優秀な弾薬庫なので米軍が使用するため、破壊しなかったのだそうです。



昭和20年、北山田に空襲があった。まもなく戦争は終わった。

空襲

深夜

悲鳴のようなサイレンに

姉妹で防空壕に飛び込んだ

怖いもの見たさから

そっと壕から外に出た

されいだの一言

照明弾で真昼のよう

無数のサーチライトが敵機を掴む

高射機関銃の曳光弾が流星のように追う

高射砲が炸裂

焼夷弾が田畑を舐めつくす

破片の落下物で身動き出来ない

電波妨害のアルミハクが夜空に舞う

横浜 川崎が燃え上がり 深夜の夕焼け

突然三人の耳元に 異常な風圧を感じた瞬間

裏の竹藪に砲弾が轟音で炸裂

高田の高射砲陣地が慌てた低空射撃のそれ弾

親父の爆弾

バカヤロウ 死ぬぞ 隠れろ

知覧の丘 ちらん

— 知覧特別攻撃隊 — 鎮魂により

南九州南端に陸軍特別攻撃隊の知覧基地があり、戦後、そこに隊員の霊を慰める平和観音堂、記念館が建てられた。旅の途中、訪れたが、戦中を経験した者とすれば、五十年の過去が蘇り、自分の過去と交差し、心から手を合わせた時、熱いものがこみ上げてきた。

無言で遺書遺品を見せてもらった。

この基地は、十七歳、十八歳の少年航空兵が、二百五十キロ、五百キロ爆弾を飛行機に抱え、敵艦に自爆する特別攻撃隊であり、昭和二十年六月十一日まで実施されていた。

知覧の町に軍指定の食堂があり、その食堂に鳥浜トメさんという方がおられ、明日死ぬ運命にある少年兵たちの面倒を、母がわりによくみておられたそうです。私たちが、知覧を訪れる五日前に亡くなられたが、そのトメさんにとって、一番印象に残ったのが蜚だそうです。

終戦間際、明日出撃する少年兵が食堂を訪れ、「おばさん、明日俺は死ぬけれど、両親兄弟に別れを告げることは出来ない。遺書は書いた。しかしおばさんを母さんと思つて、明日の夜、俺は蜚になつて帰ってくるよ」と、言つて基地を飛び立っていった。

その夜、今度飛び立つ仲間の少年兵が食堂を訪れ、おばさんに別れの挨拶をしていると、一匹の蜚が食堂の中に飛んできた。おばさんは、昨夜の少年兵の名を呼び、「よう帰ってきた」と、泣きながら蜚に呼びかけ、迷わず成仏してくれと、手を合わせたという。

明日飛び立つ少年兵も、俺たちも明日蜚になつて、おばさんに会いに来ると約束、翌日南の空に命を散らした。

その日、無数の螢が食堂に飛び込んできた。おばさんは、泣きながら螢に隊員の名を呼び、早く故郷の母の胸に、懷に飛んで帰りなさいと呼びかけ、冥福を祈り、戦後も息絶えるまで、若くして立った少年の霊を弔ったという。これは実話として語り継がれている。

旅先で求めた『知覧特別攻撃隊』（一九八九年初版、シャプラン発行）には、隊員の写真、遺書、日記、手紙、記録、名簿が載っている。

鎮魂の意味を込めてその一部を、知覧特攻平和会館の協力を得て、抜粋掲載させていただく。

第七七振武隊 相花信夫 少尉 十八歳

遺書

母を慕いて

母上お元気ですか

永い間本当に有難うございました

我六歳の時より育て下されし母

継母とは言え世の此の種の女にある如き

不祥事は一度たりとてなく

慈しみ育て下されし母

有り難い母 尊い母

俺は幸福だった

遂に最後迄「お母さん」と呼ばざりし俺

幾度か思い切って呼ばんとしたが

何と意志薄弱な俺だったろう

母上お許し下さい

さぞ淋しかったです

今こそ大声で呼ばして頂きます

お母さん お母さん お母さんと

第五七振武隊

山下孝之

少尉 十九歳

遺書

只今元氣旺盛、出発時刻を待つて居ります。愈々此の世とお別れです。お母さん必ず立派に体当たり致します。

昭和二十年五月二十五日八時。これが私が空母に突入する時です。今日も飛行場まで遠い所の人々が、私達特攻隊の為に慰問に来て下さいました。丁度お母さんの様な人でした。別れの時は見えなくなるまで見送りました。

二十四日七時半、八代上空で偏向し故郷の上空を通ったのです。

では、お母さん、私は笑って元気で征きます。

永い間御世話になりました。妙子姉さん、緑姉さん、武よ。元気で暮して下さい。

お母さん、お体大切に。私は最後にお母さんが何時も言われる御念仏を唱えながら空母に突入します。

南無阿弥陀仏

昭和二十年五月二十五日

誠第三七飛行隊 小林敏男 大尉 二十三歳

遺詠

死出の旅

古郷の梅をながめてさまよひぬ

これも遂に最後となりぬ

死出の旅と知りても母は笑顔にて

送りてくれぬ我くに去る日

広き広きホームに立ちて見送るは

母と妹と共二人のみ

捧げたる生命にあれど尚しかも

惜しみて遂に究め得ざりき

我が生命捧ぐるは易し然れども

国救い得ざれば嗚呼如何にせん

第三振武隊 前田 啓 大尉 二十三歳

俺が死んだら

何人泣くべ

第一〇三振武隊 城所一郎 少尉 十九歳

遺書

兄上姉上様

種々御世話になりました。

何とも思い遺す事はありません。

後はくれぐれも

よろしくお願い致します。

第五六振武隊 上原良司 大尉 二十二歳

遺詠

人の世は別れるものと知りながら

別れはなどてかくも悲しき

第六六振武隊 後藤光春 大尉 二十二歳

遺書

幼き頃の御指導を謝します。

神明の加護の許に神通体当なりに参ります。

* 初陣が最後 *

*

完全ナル飛行機ニテ出撃致シ度イ

遺書

第二十七振武隊（疾風隊） 原田 栞 大尉 二十六歳

出るときと引つ込むときが最も大切だと誰かが言つた。
皇国に生れ君のために地獄に行く。何たる極楽ぞ。

たかが五尺の体を、それを五万トンの棺桶に休む。どうして永遠たらざるを得よう。吾人のさゝや
かな力、それが大君を、そして祖國を無窮に生かす一粒の仁丹ともなるなら薬屋の光榮これに過ぐる
ものやあるばじる。征くものは風の如く氣易い。されど残る者の心情には不歸鳥の憧哭レミツクがある。
情けは涙である。そして愛はせつない。されど忠は更に至上だ。

天皇陛下万歳

祖國よ。トワニ幸あれ。幸あれ。幸あれ。

第一六五振武隊 枝 幹二 大尉 二十二歳

あんまり緑が美しい

今日これから

死に行く事すら

忘れてしまひそうだ。

真青な空

ぽかんと浮ぶ白い雲

六月の知覧は

もうセミの声がして

夏を思わせる。

作戦命令を待っている間に

小鳥の声がたのしそう

「俺もこんどは

小鳥になるよ」

日のあたる草の上に

ねころんで

杉本がこんなことを云っている

笑わせるな

本日一三時三五分

いよく知ランを離陸する

なつかしの

祖国よ

さらば

使いなれた

万年筆を“かたみ”に

送ります。

（以上『知覧特別攻撃隊』より抜粋 知覧特攻平和会館協力）

死出の旅

十七歳 まだ高校生の陸軍少年航空兵

十九歳 大学の海軍航空予科練習生

やっと 操縦桿を握れ一人で飛行出来たら
爆弾を抱え

敵艦に体当たり自爆せよとの命令

特別攻撃隊 時代とは言え むなしい生涯

この世に生を受け 恋を語ろう時もなく

救国に命を捧げるのが 男の道と

幼い頃から 耐える事のみを学び

国家の安泰を守る少年は先兵として

極秘出撃には家族にも告げず

今生の別れは厳しい先輩と 後を追う後輩のみ

棺桶はオンボロ飛行機

特攻機が故障して途中の島に不時着した特攻隊員は
基地を飛び立ってから オカアサン カアチャンと

叫び続けていたと言う

同僚も同じ母を呼び続け 自爆したと思うと……

数日して 何故生きて帰ったと隊長に叱咤され

再度 出撃命令で戦友の後を追ひ 命を絶った

南の空に散った少年の魂は

蛍になって 母の懷に帰ったろう

知覧基地を飛び立った特攻隊は、沖縄海域まで二時間の飛行距離だそうです。

『知覧特別攻撃隊』に、隊員は二時間のあいだ、どんなことを考え、操縦していたのだろうか、記していた。基地にいる間は軍律厳しい中にあり、女々しい態度はとれず、機上の人となつてから、今生最後の時間、おそらく孤独と戦いながら、少年兵は声を張り上げ、「お母さん、お母さん」と叫んだであろう。妻子ある隊員は、妻を子呼び続けて、家族の幸せを自爆するまで念じていたであろうと、故障して不時着した特攻機の隊員は語り、その隊員は再びオンボロ飛行機で戦友の後を追う南海に自爆した。

現在まで、歴史の中で、忠臣蔵、白虎隊、爆弾三勇士など数知れず語りつがれてきたが、大戦末期の特別攻撃隊の存在ほど、悲劇はないであろう。

利権をむさぼる現代社会に、我が身を捨て国のため殉じた少年の清らかな行動を思い出し、後世に伝えるのが供養と感じている。

お盆になると、造成前の田圃に無数に飛んでいた螢を思い、現在あることに感謝している。

合掌

母恋し 泣く子に螢 泊まりおり

征くホーム 母娘二人に しみる風

征く子らは はかない螢に 写しおり

知覧基地 爆音消えて 油蟬

降伏のビラ

十九年頃から、盛んに米軍機によりビラがまかれたが、それをひろうのに最初は抵抗があった。デマだ、悪質な宣伝だ、ひろうな、読むなど言われたが、あまりの量にひろわざるを得ない。

ビラには日本兵の瘦せ細った裸の写真があり、文句は、「貴方のおとうさん、兄弟、旦那さんは、食料もなく武器もなく本土からの救援もなく、飢え死を待つばかりだ。早く戦争を終わらなければ最愛の人は死んでしまう」、というものだった。

終戦後、私がニュータウンのために仮移転するまで、戦時中の神風攻撃隊の新聞の切り抜きと一緒にビラも保管してあったが、引越しの時、行方不明になってしまった。

あのビラは真実であった。

当時でも、大都市はほとんど焼かれ、物資はなく、制空権は完全に米軍に握られ、人手不足で食糧生産も落ち込み、どう意気込んでいても誰も口にはださぬが、勝つとは思えなかった。

いらだちと不安が交差し、まかれるビラを無視しようとするが、これが真実かもしれないと、読んだ。

戦後ビラ以上に南方最前線は酷かったと聞く。

物資の不足

四方海に囲まれている日本が、海上輸送が断たれては裸同然、食糧資材が無くなるのはあたりまえ、特にマツチは極端に不足して、煙草を吸う人はバケツに灰を入れ、火種を灰で隠し火が絶えぬよう野良作業に持ち歩く人もあった。

煙草とて配給が少なく、松葉の乾燥した物とか、藻草を乾燥したのを紙で包装して煙草を作り、吸っていた。硫黄が不足し、ある部隊では農家を尋ね、貴重なマツチを集め硫黄を取り爆薬を造る作業までしていたと聞く。今では笑い話だが、その当時は真剣だった。

衣類、砂糖、塩、米、その他生活用品全部配給制度であり、配給があれば量が少なくともよいが、配給もなくなってしまうことが多かった。

農薬、肥料はなんにもなく、その頃は無公害野菜だが、作る人が戦地に行き、残った年寄り女子供だけでは生産が間に合わぬ。

小学校高学年が、農村では一番の働き手であった。徹底的な物資の尊さを我が身で知り得た経験は、一生離れないであろう。

また、いかなる窮乏の生活にも耐える自信がある。豊かな時代に育った者は可哀想だ。必ず窮乏の時代が目に見えている。

自転車のタイヤがなく、つぎはぎだらけのチューブはすぐパンクするが、自転車は貴重品だった。リヤカーのスポークは木で、タイヤはモクタイヤといって空気が入らぬタイヤなので重かった。ゴムが徹底して不足していた。そのかわりパンクはしなかったが、スポークが木なので乾燥しすぎてつぶ

れてしまったこともある。終戦後しばらく木のリュームは続いた。

衣服は本家がわからぬほど継ぎ剥ぎであり、同じ色の継ぎ布がなく、黄色の着衣に青の布で補修ということもあった。ちょうど今、六本木や新宿に、終戦当時の貧しかった服装が若者の間に再現されているように見える。

砂糖は貴重品で、甘味料は薩摩芋にたよっていた。薩摩芋ようかん、チキンシボリ、薩摩芋のお汁粉、当時はそれでも甘かった。もちろん、糖尿病などなかった。麦御飯の中に薩摩芋を千切りにして炊き込んだり、栗御飯に大根の葉と薩摩芋をいれたり、これはおいしかった。一粒も残さず食べ、茶碗にお湯をいれ、栄養がもつたといえずすいで飲まないと怒られた。

今でも、仏教のお坊さんの修業では、茶碗にお湯を注ぎ、たくあんで洗い飲み干すと言われます。よく今の若い者は汚いと言いますが、自分が食べた茶碗が汚いのなら、食べることはないと思う。娯楽は何もなかった。芸能界の方は軍の慰問にかりだされ、ラジオも隣組に一台あればよいほうで、情報も良い戦況以外なかなか流れず、しかし、目の前で、東京、横浜が丸焼けになり、迎撃する戦闘機も飛ばなければ戦況不利はわかってきた。

終戦

父が城山より養子にこられてから桃栽培が行われた。綱島の桃として有名だった。収穫は六月から七月にかけて行われ、短期間のため忙しかった。桃の収穫中だった。夜中まで残業をしていた時、新屋の清助さんに召集令状が届いた。忘れられぬことだ。

清助さんは二回目の召集であり、今度は生きて帰れぬと家で心配しているから、すぐ帰るよう勧め



連合軍の軍艦に竹を並べて向かったなどと今ではとても信じられないが、この辺りの竹がイカダ代わりに利用された。



鉄の供出も、あらゆる鉄製品を含めて行われた。

たが、朝二時頃まで手伝っていた。おそろく、今生の別れとの思いが強かったのではなかったか。

終戦のふた月前、食糧不足に桃栽培はけしからぬということで全部伐採したら、終戦になり、何もかも終わった。

八月十五日、重大放送があるといわれ、ラジオを聞いた。雑音が入りよく聞き取れなかった。夕方になってようやく、戦争が終わったのだと思われた。空襲のサイレンが鳴らず、飛行機も飛ばず、急に静かになり、何かしら呆然^{ぼうぜん}となり、気が抜けてしまい、仕事も手がつかなくなった。

終戦の夜、倶楽部で同志と銃剣術をしてうさばらしをした。これからどうする、と青年団で激論を交わした。その頃デマが横行し、男は殺される、女は辱め^{はずかし}を受けると言いふらされ、かなり動揺していた。とりあえず、女子供は箱根に逃がそうと真剣に考えた。馬の背に焼き米、必需品^{ひつと品}を乗せて準備したが、実行しなくてよかった。情報が今のようになれば考えられぬことだが、世の中が変わる時代の出来事だ。

青年学校の武装解除

終戦、そして米軍の進駐^{しんちゅう}と、今まで遭遇^{そうごう}したことのないことの連続であった。

ある日学校から連絡があり、所持している銃器は模擬銃でも全部学校に返還するように、部落の生徒に徹底するよう通知があり、指定された日に持ち寄った。

昼間は持ち歩けない、見つければ進駐軍に撃たれるというので夜間出かけたが、途中、南山田に出たとたんに、自動車ヘッドライトを照らし勝田方面より走ってきた。当時、自動車はほとんどなく、車と見れば米軍と思い、土手下の草むらに飛び降り、隠れながらようやく学校にたどり着いた。

学校には駐在のお巡りさんが立ち会いにきていた。特に実弾が撃てる三八式歩兵銃の五挺と、終戦まぎわ本土決戦に備え二挺の新型歩兵銃が軍から支給されていたが、その七挺がとりあげられ、その他は焼却処分することになった。が、半分も集まらなかった。

集めた銃器はまだ事態が変わらぬかもしれないと、防具、銃、剣、葉莢、背囊を清林寺の本堂の縁の下に隠した。しかしそれから幾月かたつて本堂の下に入つてみたら、何もなかった。関係者に聞いてもわからず、いまだに不思議な結末であつた。

戦後、箆^{かじ}作りの講習を青年会で実施した時、銃剣を竹裂^さきに使用している者がかなりあつた。ニュータウンで家屋の解体作業を請け負つた時、錆びた青年学校の模擬銃が出てきて、青春の墓標^{ほひょう}を見た思ひであつた。

復員

終戦間もなく、中川小学校前を復員する兵士が通ると、学校には血氣盛んな戦車隊がまだ頑張つていて、まだ帰るのは早い現隊へ戻れと憤慨^{ふんがい}していた。

ちょうどその頃、私宅に長野県に大本營を構築していた陸軍の下士官が、軍刀を持ち、顔中髭^{ひげ}で埋まり、敗戦の無念さを態度に表しながら、父に「先輩、負けても残念に思わんか。我々は長野の大本營に天皇陛下を擁して戦う。断じて降伏はできん。先輩はどう思うか。関東軍や我々が決起すれば、民衆は立ち上がる氣があるだろうか」と、目は血走り、もの凄^{すご}い形相^{ぎようそう}でつめよつてきた。

たしか二十三歳くらいだった血氣盛んな青年下士官の彼には、無理からぬことだった。父は青年学校の軍事訓練指導員主任であつたため、相談にきたのであつた。

彼の落ち着くのを待つて父が、「降伏こうふくは天皇の命令である。貴方は天皇陛下の命により軍人として奉公してきた。天皇は忍しのびがたきを忍び、耐え難たきを耐え、新しい日本を造ってくれと言っているではないか。俺もつらい。教え子が戦死をし、お前より俺もどうしてよいか迷ったが、今は戦争を続けられ国も民族も亡くなる。戦死した若者が、それで喜ぶか。国をつぶしては、英霊が帰る国もない。死んだ兵士は家族の安泰を願ひ散った。死んで守った国を再建するのが、生き残った貴方のこれから道であり、天皇の命に従うのが軍人の使命だ」と話し合い、現隊に帰り早く復員するよう説得、ようやく帰って行った。長い時間だった。

庭には、復員届けの用紙をもらいに復員兵が来ていたが、なにせ家の中に軍刀を引っさげた軍曹の階級章をつけた下士官が血走ちみっていては、「復員しました」と言えず、待つていた。

帰り際、庭でまだ、復員兵に「お前は何処の部隊か。全員解散したのか」、と問いつめていた。この下士官は山田の出身で、戦後役所に勤め、定年後、町会組織に奉仕ほうしされていた。

それから続々、大陸から、南方から、復員兵が帰ってきたが、戦死した家族には言葉もなかった。

息子は、夫は、何のため戦死したのか、慰めの言葉も見つからぬ。

中には、硫黄島が玉碎ぎょくさいしたので師団から戦死の公報が届いてお葬式をすませた方が帰ってきた話もあった。

公民館で青年会の会合を開いていた時、暗闇の桜の木の下に復員兵が遠慮がちに立つており、役員が近寄きよって見ると、戦死したはずの方なのでびっくり。その方の弟さんが会合にきておられたので、急いで家からお母さんを連れてきて対面たいめんさせた。

その方は除隊解散ならぬうちに、噂で横浜は全滅と聞かされていたので心配になり、そっと確かめに抜けてきたと言う。役員さんが自転車で綱島まで送り、現隊のある横須賀まで送っていきました。

数日してその方が、自分の墓標を担かたいでお世話になりましたと、墓地から帰りに寄られました。玉碎した島でよく生きられたものだと、お話を聞きましたら、硫黄島は艦砲射撃で地形が変わって

しまったそうです。仕方なく洞窟^{どうくつ}に潜み^{ひそ}、夜襲攻撃^{やしゅうこうげき}を続けていたが、ほとんど戦死してしまい、洞窟
の中は兵隊の死体で踏み場もないくらい。
食料はなく、爆撃で草もなく、残された兵隊も栄養失調で次々亡くなり、最後は戦友^{しかばね}の屍から出る
ウジムシをひろい食べていたそうです。
悲惨^{ひさん}という以外、言葉になりません。

応召に 日数足りぬ 野良の露

花押し葉 慰問袋に しのぶ妻

再召集 覚悟の顔に 泣く時雨

特攻隊 営になると 飛んで帰し

盆営 十九の夏に 戻り舞う

蒸し暑き 戦野に朽ちし 盆法要

帰らざる 特攻基地に 営帰し

終戦の 記念日泣くな 油蟬

戦後

復員してきた村の青年十五名で、何とか日本を復興ふっこうさせるには農業を確立せねばならぬと、富士会という会を作り活動を始めた。

当然のことながら化学肥料とてなく、堆肥たいひ作りのため養豚ようとんを始めたのだが、子豚が手に入らない。そこで精米した米糠こめぬかを共同で溜ためて、馬車に積み込み、子豚と交換に相模原まで行き交渉した。貴重なため、数頭しか分けてもらえなかった。

今では三十分の距離だが、馬車と自転車で一日かかの子豚探しの旅であった。豚は繁殖はんしよくが早いので、たちまち増え、各戸で必ず飼育するまでになっていた。貴重な肥料源と収入源であった。

栄養補給の意味で山羊も盛んに飼われ、羊も多く飼われた。羊毛は毛糸に精製して衣料の補充にかわれていた。馬場先生が指導にあたっていた。

二十七年二月、初めて乳牛を導入した。とにかく初めて乳牛の実物を見た時、不安が先になり、この日より生活が一変した。絶対家をあげられなくなってしまった。三六五日、朝四時から夜十一時までの格闘かくとうが始まったのだ。

ミルクが出来たから、今度はイチゴを栽培しようと夢は果てしなく広がっていったが、苦悩の連続であった。イチゴの収穫は半月くらいだが、これも朝露のあるうちに採取して、すぐに箱に詰め、傷むので背中に背負い、自転車で、東京の馬込市場まで出荷した。背中に背負った角張った箱は四十キロはあった。重かった。丸子の橋で休もうとしても、市場までの時間がない。苦しかったが、生活がかかっていたので、夢中でペダルをこいで走った。ようやく市場に着くと、すぐセリにかけられた。

一度途中で自転車パンクして、歩いて市場までたどり着いたら、すでに市場は終わっていた。二、三名残っていた八百屋さんが、気の毒がつて引き取ってくれた。なさけない思い出である。

乳牛が増え、六頭になった時も、トマト、ナスなどの野菜を栽培し、稲作も四反五畝耕していた。全部夫婦で働いていたが、乳牛三十五頭の時に、農協から三百万円借入して鉄骨牛舎を建てた。その当時、お金を借りることは一番恥ずかしいこととしか受けとめてもらえなかった。男全さんところは借金したと、偏見の目を強く感じた。

借入金をしてからの労働は地獄だった。朝、目を覚ませば一分の暇もなく働かねば一日の仕事が消化できなかった。体調が悪くても、薬を飲みながら、注射を打ちながらも、休むことができなかった。無理がたたり肝臓を悪くしてしまい、医者から静養するように注意されたが、交替要員がいなかったので、牛小屋の角に布団を敷き休みながら乳搾りちらしはをした。

私は長男だから仕方ないが、妻には気の毒だった。一生懸命尽くしてくれた。私より倍以上の過酷な労働であった。

先にも述べたが、朝四時に遅れると大変、乳の出荷時間に間に合わなくなる。妻はお勝手をやりながら牛舎の手伝いをした。牛乳は六時までに集荷所へ車に積んで行き、そのまま、東京馬込町までモヤシ粕かすを取りに行き、帰ってきてから朝飯を食べ、モヤシ粕を降ろし、すぐに農作業。お昼は牛に食べさせ、乳を搾り、一日食べる牧草を刈ってから、昼飯。二時また農作業。夕方、牛に食べさせて、掃除をして、九時に夕飯を食べ、十時より搾乳さくちゅう。十一時に終わり風呂に入り休むのはいつも十二時を過ぎていた。

睡眠時間四時間、三六五日、いつも休みなくよく続いたと思う。

牛のお産は大変だった。酪農仲間が手伝いにくれた。特に子宮脱しきゅうだつには苦勞した。全部出てしまった子宮を少しづつ腹の中に入れてはつとすると、また出てしまい、裸になって血だらけになりながら、治療した。

お産の時、逆さ子は子宮の中まで片手を入れて、子牛を子宮の中で反転させるのは大変だった。
お産で死んだ乳牛が多かった。

三十七年頃、豪州オーストラリアからジャージー種の小型の赤茶の乳牛が導入されたが、粗食に耐え脂肪分の多い乳が出たが、乳量が少ないので、あまり繁殖しなかった。

〔北山田の夜空は空気がきれいなので月が澄んでいた〕

盆休み 澄みたる月に 吸い込まれ

盆の月 我れ一人では 惜しくなり

盆提灯 知らぬ顔して 踊りおり

空模様 首筋痛し 盆踊り

浴衣着に 戸惑う視線 盆踊り

盆踊り 売店気になる 空模様

あれやこれ それそれ主役の 盆踊り

旧盆の 月に現世 語りかけ

大規模土地開発で 村は街になった



開発によって多くの農家が解体された。上は解体前の私宅の配置図で、母屋を中心に納屋、椎茸小屋、釣瓶井戸、墓地があり、周りを屋敷林が囲んでいた。

洪水

上流に、すみれが丘の造成が始まってから、田圃は毎年洪水に見舞われ全滅した。ようやく収穫と思うと、造成の赤土が流れ、特に道路下の水田は砂利と赤土で復帰がむずかかった。刈り取った稲が流されても、開発業者から何の補償もなかった。

川も赤土で埋まり、鰻、カタツケ、八目鰻、蟹が全滅してしまった。

農業に暗雲

三十八年頃、開発業者から、重代じゅうだい、神無谷戸しんなしやとまで開発したい話があり、拒否した。四十二年、港北ニュータウン開発の話があり、連日、公民館で論議が交わされた。

四十四年、日本住宅公団（現住宅・都市整備公団）に対し、土地の四割買収に応じました。

北山田の農民は実直すぎて、財産の四割買収には未だ足りないと言われ、分筆ぶんびつしても四割買収に応じてしまった。強制ではないので協力した者が犠牲になってしまった。

農家が土地を手放すことは考えられないことでしたが、このことを境に故郷の消滅が決定した。

公団は「はじめに協力してくれた正直者には、馬鹿をみさせない」と言われたが、現実は何もなかった。自分の財産の処理だから、他人に合わせることはないのだが、連帯感が強い部落ゆえに、行

動を共にした。このことは、噂は消えるが永遠に地権利者の魂の中に生きていくだろう。誰も非難することはない。自業自得の結果であり、街作りに協力した誇りだけは協力者のみの特権と思ひ、時効の中に消える。

ニュータウン

町全域が造成地区に入っている北山田の土地四割買収から、生活は一変した。農業継統は絶望的になつてしまつた。土地不動産屋がお土産持参で農家を訪れ、宇都宮、富士の裾野、伊豆方面と県外に土地の取得を勧めていった。

公団は、農家の移転は民間造成のように極力避けて計画すると言われたが、事業計画が公表されてみると、四角四面に線を引き、ほとんどの農家は移転になつてしまつた。

果たして何百年住みなれた農家が、墓地を発掘し、母屋を壊して移転してくれるか、信じられなかつた。特にお年を召した方が、先祖の遺産を大事にしておられるので、心配でした。

農家には、必ず大きな柿の古木があります。先祖はどんなに貧乏しても、また凶作に見舞われても、柿は必ず実をつけてくれるので、家を建てる時は柿の木を植えたのだと、祖父から聞かれました。子孫繁栄を願つた先代の生活の知恵と、尊敬の目で見ていた柿の木を伐採しなければならぬ地権利者の思ひは、当事者でなければ分からぬ思ひです。何代もお世話になつた苔むした古井戸もそうです。井戸神様と敬つて生活してきた井戸を埋める時、神主を頼んでお払いをし、井戸に感謝し、井戸の深さに節を抜いた竹筒を空気抜けとして静かに入れて埋めた。生きる水を与えてくれた井戸を埋めるのは、一番いやだった。

お墓の発掘は、隣近所お互いに手伝いながら、寺の住職にお墓の閉眼式（へいがんしき）をお願いしてから作業にかかった。最初は頭蓋骨（ずがいこつ）の掃除は抵抗があったが、続けているうちに先祖に対して「静かに眠っているのに、御免なさい」と、丁寧に取り扱う余裕がでてきた。発掘した骸骨を棺箱に入れて火葬し、換地によって新しく出来た墓地に骨壺を納め、住職の開眼式（かいがんしき）の読経でようやく墓地移転は終わった。

なにせ、何代と暮らしてきた部落全員の移転は、移転補償の低価から農民の抵抗も一部あったが、そろって移転出来たことは整然としたニュータウンの大きな要因となった。

移転

稲荷谷戸が先行造成地に指定され、一番先に移転した。移転地造成のため、稲荷谷戸原に整地され、直接移転になった。その他の移転は公団のプレハブ住宅に仮移転したが、移転補償交渉が大変だった。ほとんど仕事もせずに公団と部落全体のことでは交渉の案内をし、補償金以外の相談に乗った。特に重代谷戸、稲荷谷戸はいっせいに移転してくれたが、ほとんどの家で個人墓地を持っていたので、家の移転前に先祖の墓地移転を実施した。

墓地移転は業者に委託。骨の発掘も葬儀社に委託したが、前段として寺住職の開眼式の読経を各墓地で行い、移転後、新墓地で開眼式を行った。あまり毎日火葬場に行くので、葬儀業者に間違われたこともあった。初めは骸骨の掃除は抵抗があったが、連日立ち会いなれてくると抵抗がなくなってきた。古い墓地は相当地面が移動していた。何年もたつと樹木も移動しますので、墓地も移動したのでしよう。

引越したいとい一週間以上かかっていた。植木移動も含めると一ヶ月は費やした。先祖代々住



開発に踏み切るかどうか、日本住宅公団の職員を招いて真剣な討議が行われた。



開発のためには移転しなければならない。公団の職員がたびたび農家を訪れて説得に当たった。

みなれた家を解体するのは、想像以上の苦労があった。解体は生活対策事業として設立した山田富士組が大半は請け負った。組員は自分の家を自分の手で壊し、バックホーでつぶした。公共事業とはいえ、寂しく、その姿は哀れに見えた。古い農家は三百数十年の歴史があり、私の代で故郷が消滅するのかもしれない、申し訳ないのと、立場上の責任が絡み、複雑な心境になる。

五十五年完成

買収時の約束は五十五年完成であり、希望を持つて参加したがオイルショックとの口実で遅れた。地権利者は五十三年、むしろ旗を立てて、鉢巻、タスキで市役所に陳情した。結果は虚しく、六十二年に延期され、六十五年に再延期となり、また、平成七年に再々延期となり、諦めの心境になる。

この計画は、市・公団が計画し、住民に協力を呼びかけて実施されてきたが、高速鉄道六号線は地元何の話もなく廃止され、四号線も鶴見から日吉間が廃止され、開通はめどがつかず、実行されなければ買収目当ての計画としか思えない。平成七年度には、民間用地は約束どおり換地になることになつてゐるが、公園・事業用地の完成は、残務整理としてかなり遅れると思う。

四十五才で買収が始まり、六十八才になつてようやく民間用地だけは終わるが、鉄道が開通しない限り、完成はない。

バブル崩壊による不動産価値の暴落は、ニュータウンの是非を考えさせられる。

区画整理事業は、農業の過酷な労働から解放してくれ体は楽になつたが、自然破壊と人情崩壊は精神的に苦痛がともなつてゐる。

人生の長短に関係なく、充実した生涯にしたいものだ。

転職

農業以外考えたことない

農家が土地を離す

工場が倒産したようなもの

どうして食っていくか

中年過ぎは雇ってはくれない

区画整理に翻弄されている親父

過酷な労働から解放された嫁

さまざまないが転職にからむ

土と緑から離れられず

造園・土木に転職

時代の流れに沿っていきよう。

家屋解体

ご先祖に申し訳ない

解体する家屋から遠く離れて

老爺の一人言

草屋根を鷺づかみしたバックホーから

煤けた埃が昇天した

埃を被った作業員のやるせない顔

代々思い出の凝縮した我が城

爺ちゃんお婆あさんの孫ひいき

親父の威厳

お袋のかたくなな愛

家に奉仕した嫁

赤紙で送られ、無言で遺骨の帰還

降りかかる焼夷弾を屋根に登り

火はたきを振り回し防いだ草屋根

擦り減り、立て付けの悪い障子

風雪に耐え木目が出た戸袋

代々踏み締め凸凹になった土間

苦しかった農作業

星明かりの夜業仕事

だが家族の温もりは漂っていた

嫁いだ娘の実家は 今消えた

隣近所の思いやりも家と消えるか

老爺は生活の過去を凝視している

良いに悪いに親身になってのお世話になった

黒光りの大黒柱は役目は終わった

ご苦労様

俺の代で壊すかと

握りしめた手拭いが汚れ

濡れている



移転が済むと農家は壊され、造成が始まった。



墓地も掘り起こし、遺骨を掃除して新しい墓地に埋葬した。

造成

バックホーが弧を描き

ブルドーザーが土をえぐり

農は土作りと汗して豊かな土壌を育てたが

農地がキャタピラに軋み泣いている

小川がつぶれ 鱈、鰻はどうしたか

先代からの柿の木 あれだけは残したい

重機を駆使して移植した

水をやり見守ったが 枯れた

雑木林にチェーンソーがうなり

四季を教えてくれた山が

寒そうに丸裸で観念していた

お世話になった井戸に

空気抜きの竹筒をいれて 祈る気持ちで埋めた

移転地に変わらぬ夕日だが さみしく沈む

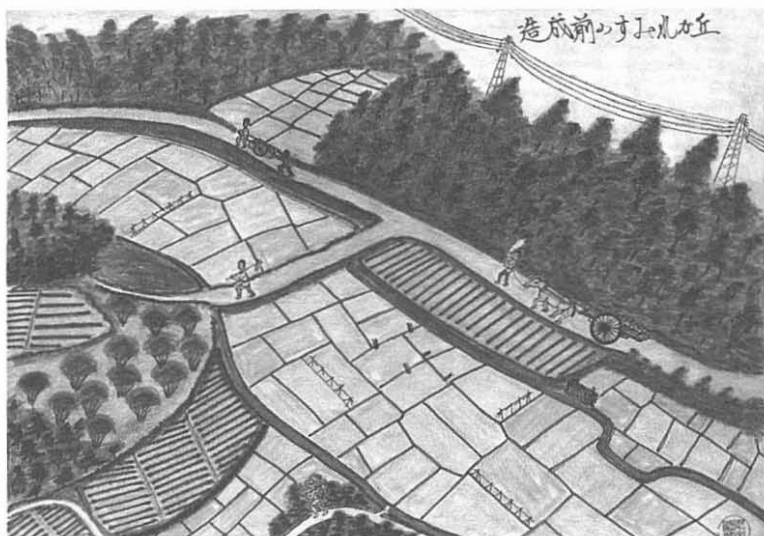
故郷は地下十メートルに永久に埋められ

故郷が消えた

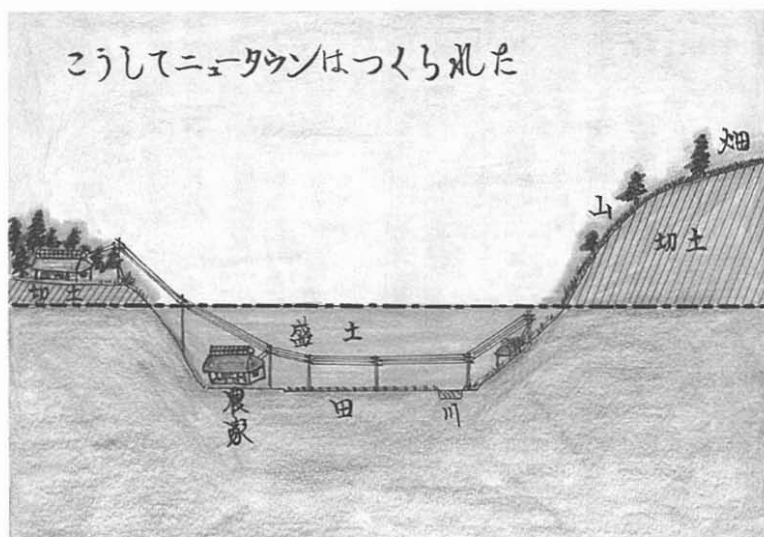
第二の故郷をつくらんがため

私情も埋めて 明日がために

大規模土地開発で村は街になった



今のすみれが丘や北山田は、こんなのどかな田園地帯だった。



造成は、高い山を削り、その土で低地を埋めて平らに行われた。日吉・元石川線の北山田交差点付近には、地下10mに北山田の故郷が埋まっている。

区画整理審議会委員選挙

任期五年の審議会委員選挙が行われたのは、昭和四十五年二月であつた。

部落で誰を委員に推薦するか、公民館で徹夜の議論が連日行われた。決まった夜は、とうとう朝になり、鶏が鳴きだし明るくなつてしまつた。

二名の指名があり、部落を二分して票を分けたが、ここで穏やかな農村に亀裂が入つてしまつた。

町内に二つの選挙事務所ができ、今まで仲良くしていた者どうしが、対立の立場になり、ささいなことで、中傷しあい監視の目と変わつていった。

選ばれた候補者は、とんだ迷惑をこうむつた。選挙事務所には幹部が早朝から深夜まで票読みを繰り返し、部落の全地権利者が運動員となり、遠くは東京、川崎方面の地権利者を探し尋ねて依頼に奔走した。

この選挙は公職選挙法に該当しないといふので、他陣営では酒、煙草はもちろん、物品の供与は公然と行われたが、北山田では何もしなかつた。

町が二分されたために相手方に押された友人は、深夜事務所に密かに尋ねて来て、公然と激励できぬ立場を理解してくれと、複数で夜毎激励のお酒を抱え、闇に消えていった。

夜になると、各辻に監視人が現れ、運動員の行動に目がひかつていた。親戚でも訪問できない状態が続いた。

二十年たつてもこの亀裂は風化されず、現在も感情として一部残っているが、住み良い町になりつつある。

事務所には毎日二十名くらいの運動員が詰めかけていたので、近所のご婦人方は大変だった。毎日交替で炊き出ししていただいた。親戚も見てはおれず手伝いに奔走したが、地権利者の親戚は監視の目が厳しく、身動きできない状態であった。

選挙当日は、荏田の投票所まで動けない老人は背負って車で送迎、公団事務所の回りは長蛇の列ができ、その周辺を候補者がたすきをかけて反目する候補者に投票するな、我々のグループの候補者に投票せよと、がなり立てていた。

区画整理でこんな馬鹿げた騒ぎは、なかったであろうと思う。

委員の立場が誤解されていた。委員は区画整理がスムーズに運営されるよう協力し、平等で公平にことが運ぶよう努力するのが責務と思うが、土地を提供した農家と対立する場面が当初は多く、審議中の議案が外部に流れて、委員と組織が混同されている場面が一部にあった。

コンピュータの数字処理に疑心暗鬼^{ぎしんあんき}ではことは運ばない。お互い信頼がかけたら、吾一人しか信ずる者はいなくなり、他人は卑下^{ひげ}したくなるのではないか。

農家は個々の営業であり、集団での組織の経験が浅く、討論は不得手^{ふえて}である。一方、組織の経験のある人は討論は得意であり、理詰めで、よく勉強しているが、立場の混同が多少あったように思う。

開票の夜、支持者の若い連中が、開票場からその当時では珍しい無線で、開票結果を事務所まで報告、当選の報に大変な騒ぎになってしまった。

市会、県会議員までお祝いに駆けつけ、深夜まで全員で美酒に酔ったが、費用は全額支持者の負担であり、候補者には迷惑はかけぬ、これからが大変なのだからと、恐縮してしまった。

友人という言葉を選挙を通じて噛みしめ、一人のひ弱さを感じた。

人は、他人や友人に支持され肉付けされて出来上がることを強く感じ、援護^{えんご}してくれる方々に感謝せねばと思う。

二回目の選挙の時、当選祝いに日吉の妹が、地域の方に兄が世話になっているというので、深夜ま

で手伝いに来てくれたが、翌日、夫、四十八歳が、島でスキューバダイビングを親子で楽しんでいた時、事故で水死してしまったことは忘れられない。

いてし月 靴音さけて 友は去り

喜びの たより届かぬ 冬の海

野良育ち 友情冴える 神無月

有り難き 他人なくして 吾はなし

生活対策

間もなく、住民協議会が組織され、生活対策部が創設されたが、換地後の土地^{かんち}利用に対する生活対策に重点がおかれた。

北山田は全町ニュータウン地区に入ったので、他町と異なった立場にあった。

他町は調整地区があり、直接生活が脅かされる心配がないので、将来の土地利用を考えればよいが、我々は明日の生活を考えねばならない。

昭和四十九年、同志七名で、買収された公団の土地の草刈りを請け負ったのが始まりで、山田富士組の基礎が築かれた。

町内の農家に呼びかけ、同志十七名で、有限会社山田富士組を昭和五十三年頃設立し、事務所兼倉庫は自宅の牛小屋を改造して営業した。

仕事は公団の土地の草刈り、仮移転の引越越し、移転家屋の解体、植木の移植、墓地移転、造成地の伐採、造成工事など何でも請け負った。

当時、横浜市の港北ニュータウン事務所の所長をしてもらった渡さんが、これからは重機じゅうきの免許がないと営業に支障をきたすからと、重機免許取得を勧めてくれ、大変お世話になりました。

藤沢の重機研修所に二名づつ交替で通い、学科、実習と厳しい特訓を受け、十三名が免許取得できました。最初に研修所に通ったのは私と織茂君でしたが、現場ではブルドーザーは使っておりませんでした。実技は自信を持っていきましたら、いきなり大型のバックホーでの実技であり、全然経験がないので四苦八苦、指導員から怒鳴られ、棒で叩かれ、足で蹴られ、さんざんでした。

これも安全教育を徹底する指導員の温情教育でした。実習以外は親切な方で感謝しておりますが、日により重機の機種が違い、それぞれ操作が異なり、苦労しました。免許を手にした時は「俺もオペレーターになれたんだ」と土木工事の励みになり、急速に仕事が増え、社内も活気が溢れておりました。

昭和五十六年、有限会社から株式会社に変わり、全員が株主になり、順調に発展しておりました。残念なことは、会社の一番中核の渡辺忠夫君が四十二歳で白血病で他界したことです。

彼は生真面目で、社員の面倒見がよく、洞察力に優れ、富士組の牽引車けんいんしゃであった。仕事には妥協は許さない完璧主義かんぺきしぎで、ゴルフにもよく表れていた。納得するまで練習し合理的なプレーでいつも上位にいた。残された奥さんと子供さんを当時は心配したが、近所の方の温かい見守りに、子供さんも立派に成長されました。仮移転から転々とした生活のなかで耐えられた家族を、天国の忠夫君に報告するのも近い歳になってしまった。

自分たちの故郷を壊すのは、仕事とはいえ、いやなものだ。

草葺きの家屋をバックホーで壊し、墓地を削り、小川を埋め、豊かな畑を剥ぎ、四季折々衣替えする雑木林を伐採し、稲穂波打つ田圃を地底に沈め、最良の友を亡くした。

住みよい街作りとは、過酷な犠牲により生まれるものだと感じた。

造成工事をやりながら、技術資格の問題が浮上した。最低でも二級施工管理士の資格が必要になり、会社には資格者を雇う余裕もなく、仕方なく、東京電気大学で土木学科講座会が開かれたので通うことにした。

実地は地崎工業や大林組に下請けに入っていたので、所長に教えてもらい、試験は東京の青山学院で行われた。何しろ初めて大学の教室に入るので、緊張して制限時間いっぱい使って挑戦、三十分過ぎたら答案が出来た人は提出でき、続々席を立った。

私が一番前の机だったので、後ろを見ることができずにいたら、試験官が「急がなくてよい、時間はまだある」と言われ、あまり静かなので振り返り見たら誰もいなかった。お陰で資格が取れた。

次に二級造園施工管理士の資格が必要になり、農科大学の教室で学科試験が行われた。猛暑の中、与えられた竹と石で築山つきやまを造り、権年寺柵けんねんじさくを九十分以内に完了する作業でした。

富士組で四名合格、翌年一名合格してようやく基盤が整い、その後一級施工管理士も増員、技術面で大手建設会社の支援を受けながら、公団の指導と市のアドバイスのより安定した生活対策になっていった。

重機はリースを主体に、中型バックホー一台購入、何よりもオペレーターが自前なのがよかった。作業着、靴は会社負担になっていた。大事なのは子供たちに働きに出る親の背中を見せることで、子供を塾に通わせるより教育になると、話し合った。

事務所も私宅が仮移転したので、同じ場所に仮移転し、その後、川崎市境に私の換地を受け、銀行から借入金をして事務所を建て、倉庫をセットし営業している。難点は、社員全員が地権利者であり、それぞれに家庭では経営者で、使われた経験がなく、当初は心配した。仲間意識が強く、意見の

対立が時にはあったが、愛社精神旺盛で切り抜け、今日まで継続してきている。

この間、家庭の都合により四名の方が退社したが、ニュータウン造成工事の終息に伴い、造園施工管理業務をニュータウン内に求め、専門の車両機器を導入、民間工事も手掛けて働いている。

最初は生活対策ということで、各地区で、それぞれ八社の会社を設立したが、農家は個々の生活が基盤なため、組織で働くことへのためらいと、意見の対立が収束できず、設立まもなく富士組以外は解散してしまった。

一時期、順調に運営していると、僻み、妬み、侮蔑の眼差しを感じたが、我慢と忍耐で二十年が経過しようとしている。生活対策の富士組については、前にもふれたが、生涯のなかで物資両面の支援について非難もあるが、成長を見て自己満足している。

息潜む 朝露含む モミジ濃く

瞬きも せぬぼた蛙 池揺らぎ

早う行け 時雨の車道 ぼた蛙

眼差しを 背なに朝焼け 道急ぎ

亡き友の 保護帽雷雲 薄く見え

夏雲に 声なき友は 遠く消え

動かざる 藤棚蜂が 食事中

静かなる 新緑ゆれて 夢うつつ

鯉のぼり 隣家に逮捕 春嵐

予報晴 乾きし庭の 蛇口枯れ

雷雲に うらぎられたり 残暑かな

審議会解散

平成八年九月十二日、審議会は二十三年間の幕を閉じた。

長くも短くも感じられる歳月であった。

審議会委員として信念を通してきた自己満足だけが残った。

時には我田引水の意見もなくはなかったが、私の不器用な性質は直らなかつた。

残念なことは、公団の四割買収に応じた方には馬鹿を見た、このないようにする、と公言されたことが無視されたことで、生涯、心の片隅に、わだかまりとして残る。

五期目の審議会の当初は、農家と勤め人との間に対立があつた。

しかし、会が重なるにつれてお互い紆余曲折はあつたが、理解し合える仲になり、終止符を迎え

た。

幻の鉄道駅を抱えた地域とすれば、何で収束なのか疑問が残る。

時代、世代が変わるから仕方がないが、区画整理は平等の負担と平等の恩恵を受けることが前提と
思っている。

二十有余年前、田畑を耕し、竹林を育て、放牧の牛を追ひ、朝露含む苺の収穫、四季折々衣替えする
雑木林に囲まれ、鰻、鮎、カタツケの捕れる清水の小川、時間が止まったような日溜まりの静寂が
あった故郷。初夏には、田圃から湧き出る螢の乱舞。秋は、澄み切った果てしない宇宙の星空と満
月。冬、積雪三十センチの雪かきの汗。春は桜の下でのお釈迦様のお祭り。

先祖伝来の故郷はキャタピラの下に人情とともに埋もれた。

ニュータウンの関連団体が収束の名のもとに解散していった。解散は、次世代の故郷創造のスター
トであり、北山田に住んでよかったと言われる町にしなければ、土地を犠牲にして協力してくれた
方々に申し訳ない。

松飾り 幾つ越したか ニュータウン

老いを生き 夢に故郷 見る晦日

玄關に 老梅染みて 初参り

除夜の鐘 行列動く 初参り

コタツ出し 子らに取られて 重着し

住居表示

北山田で住居表示が実施された時、混乱がありました。

北山田では年々人口が増加して今日まで経過しましたが、先輩の指導で、すでに過去三回も町名について住民投票が行われ「北山田」と決定しておりました。

行政から住居表示の要請があり、すでに決まっている「北山田」でお願いする予定でしたが、新住民より再々度投票を実施するよう要望があり、その要望を受けたのが混乱の始まりでした。

一部の方ですが、「町会の運営が悪い、何回投票しても北山田に決定してしまう」と異論を唱えて投票を棄権し、結果は圧倒的多数で「北山田」に再々度決定しました。

ところが棄権された方々は公園に集まり、町会長を呼び出し、取り囲み、「この場で北山田の町名を取り消せ。北山田では土地の値段が下がる。山田では田舎臭い。案山子^{かかし}を思い出す。山田は百姓のイメージが強い。北山田以外の町名にすると今、約束しろ。お前は態度が悪い。知り合いにも北山田に住んでいるとみっともなくて言えない」と詰め寄ったのです。

いかに町会役員はボランテニアとはいえ、侮辱と差別的な発言に情けなく思ったが、町会を理解し支持してくれている大勢の地域の方々の支えを信じて、二時間に及ぶ罵声^{ばせい}に耐えた。

残念ながら一部の方は町会を脱会されたが、個々の方は思いやりのある優しい方が多く、はじめさは過去に去り、信じあえる友人が増えつつある現在は、感謝しております。

行政の立場とすれば、造成によって姿は変わり、地名も変わっては故郷の証^{あかし}が何も残らない。新しい町名が生まれているが、せめて谷戸名を残すことができないかとアドバイスをしてくれて、現在に

至っております。

町名を生かすも殺すも、そこに住む住民が、町の価値観を育てていくものと信じております。都筑郡中川村山田二区から、昭和十四年四月に横浜市に合併、山田一区は南山田に、三区が東山田に、二区が北山田になり、現在は日本一の室内水泳競技場が北山田七丁目の丘に建っています。

二丁目には北山田地区センターが活動を始めました。予定されている環状鉄道の北山田駅が、第二の故郷の土台となってくれることを信じております。

室内水泳競技場誘致

平成七年初夏、教育委員会より北山田に国際室内水泳競技場を建設するため、公聴会を開きたい話があった。公述人の募集があり、自選公選を含めて地域から応募した二十名と、参考人として北山田・南山田町会長が意見を述べた。

北山田公民館二階で、午後六時より横浜市教育委員会職員の下により開催された公聴会は、市・区教育委員会、建設業者など、四十名出席されたが、異常な緊張の雰囲気であった。

公述人の賛成の主な意見は、高台にプールができれば、災害時の緊急飲料水や防災にも利用でき、人の流れができれば、交通問題、特に環状鉄道早期開通の援護になる。

地域の健康上にも水泳は老若男女を問わず、利用できる。

以上が誘致の最大理由と意見を述べていただき、ありがたかった。

一部には、交通渋滞、騒音等、反対意見が出たが、大勢が賛成であり公聴会は無事終わった。全町区画整理の混沌の中での朗報でした。

北山田小学校開校

平成八年四月一日、待望の北山田小学校が開校になった。

町の小学校は核的存在と思う。集団での子供の笑顔は、活気があり、たのしい。家庭も同じ。親は子供を中心に汗をかき、家族の幸せを念じ努力している。

町も学び舎に子供が溢れれば、親の交流も親睦につながる。

学校用地の以前の谷戸名は、重代裏谷戸と呼ばれ、田圃には清らかなせせらぎが流れ、ウナギ、ドジョウ、カタツケが捕れ、邪魔になるくらいのもやが飛び交う静かな故郷でした。

造成により約十メートル盛り土されております。

近代的な素晴らしい学校ですが、内容が校舎ともども充実してもらいたいものです。

開校記念樹にしだれ桜を寄付しました。卒業に、入学に、咲いてくれたらと思っております。

併設されるコミュニティハウスは地域の懇親の場となればと思いますが、管理は市の第三セクターの管理運営になります。地域による運営委員会が結成されておりますが、実質的にはほとんど関係はなくなりました。

中川小学校を母校に山田小学校が開校の時は、父兄会PTAとしてお手伝いし、山田小学校からすみれが丘小学校開校の時は、地域として参加、この度の北山田小学校開校には地域としてお手伝いし、母校含めて四校にたずさわり、感無量です。

中川中学五十周年に思う

平成八年十一月二日、中川中学体育館で五十周年記念祝賀会が地域の代表、同窓会により開催された。挨拶のなかで五十年の歩みを大勢の方が話されたが、現在の中学敷地は戦前は小学校の農業実習地として使われ、戦時中は青年学校の厳しい軍事訓練用地でもあった。早瀬川土手との手旗信号、丘を下り川まで農道を泥だらけの匍匐前身、防具も汗を通すほどしごかれた銃剣術などが、校庭に立つと昨日のようによみがえる。二十二年に初めてPTAができ、南山田の栗原氏が会長になり、父が副会長で、予算もないとき校舎を建てなければならぬと、牛久保の陸軍防空部隊の兵舎の払い下げを受けた。地域の市川大工や鳶職を中心に関心、牛車で運搬、奉仕で仮校舎が建設された。教育振興会（農協組合長）伊藤さんの存在が大きかった。

尋常高等小学校から新校舎

中川尋常高等小学校へは 三キロ山二つ越えた

霜解け道 藁草履がとられ 鼻緒が切れた

朝礼検査で 手拭いを忘れ家まで駆け足で取りに

戻ったら一時間の授業終わり

宿題を忘れ 水の一杯入ったバケツを両手に下げ

廊下に一時間立たされた

先生の気をひこうと 先生 鞭を持ってまいりましたと

図面かける竹の鞭を磨いて得意げに贈呈
贈呈した鞭で 憶えが悪いと殴られた

先生は愛の鞭

学校から帰れば 風呂の水汲み 風呂焚き

野菜の出荷手伝い 掃除 閉まりの悪い戸締まり

勉強 宿題は二の次 子供は労働力

親の権限 絶対服従の立場

子供は学校が非難場所

生涯の思い出は

小学校に凝縮されている

新校はイタリア風のデザイン 洒落た校舎

教室はカラーで分け いたれり つくせり

もったいないな――が 実感

学校でたりなくて塾通い 子供は可哀想

勉強より大事なのは

遊ぶことと

根性と我慢と愛情

根性と我慢は今の世の中 いじめになるらしい

鉄は熱いうちに打て もいじめか

人間すなおが一番 遊びで人生を覚える

北山田小学校は すなおな児童が望ましい

町会

町会ってなに

仲よく 暮らそうというグループだよ

自分中心の世の中 難しいよ

俺が 私が 一番有能と

十人十色の頭脳が暮らす町

奉仕と信頼と我慢で

他人が認める 住みよい街作り

会員が主役 役員は脇役

有り難うと言える 町会 夢かな

誰もが新住民

北山田の縄文の住居跡の前は

誰もいなかった山川

いずれからか先代は移り住みつき

現在も繰り返し返している

年代の差があるが みんな移り住んできた住民

貴方も 私も 先代は移り住んできた

昨日移り住んできた方も

昨年移り住んできた方も

先代が移り住んできた方も

みんな同じ境遇で安住の地を定めた

人間も知能優れた動物 だが

野生動物より劣るところもある

威厳と高慢でのボス争いは猿に笑われる

平和は仲よく住むこと以外ない

健康はなにより大事だが

心の病は人との付き合いと言葉から感染

治療は相手を理解し尊敬すれば全快する

同じ一生 移り住んできた者どうし責任を取り合い

笑顔で生涯終わりたい

貴方も私も新住民

故郷

「故郷は遠くにありて思うもの」と言われるが、北山田のように一部を残して、地下十数メートル下に故郷が埋まってしまったのでは、すでに故郷はない。

視界から消える懐かしさは増す。それも我々の年代だけの郷愁きょうしゅうかもしれない。人が生きるには環境はよかった。

きれいな小川、四季折々の山野の衣替え、人情豊かなお付き合い。近所に不幸があれば家族の身になつて心配し面倒を見、お祝い事があれば我がごとのように喜び幾日も手伝い杯を重ねた。心の環境

は道は悪くてもよかった。

造成が進み、ガス、水道完備した構造だけは環境の良い街ができたが、人情も心の環境も地下に埋まってしまった。

毎年盆の近くになると、夕方、螢の群棲に団扇や竹ぼうきを子供らは振りかざし遊んでいた。

あの螢は何処。神秘的な螢の自然の営みを知らぬ、今の子らはかわいそうだ。

山あり谷ありの故郷には、他人があつて個人が生活できる風潮があり、整然とした街には、自分が中心に世の中が動くと思つてゐる人が多い。

この街も幾星霜かさねれば、第二の故郷になる。時間がたてば人情も芽生え、自己過信も薄くなるだろう。昔の心の環境が、よい故郷が、再生されることを期待いたします。

螢追う 子らに重たき 竹ぼうき

背なの子に ふりまわせたり 螢がり

錆びた鍬 落ち葉寝る畠 打ち込みて

夕ばえに みとれて悪寒 汗冷えて

落葉掃き いたずら風に 遊ばされ

藁草履 鼻緒切れたり 霜解路

満月に 秋の遠吠 しみる空

落葉の 木はだ吹きぬく 風しみて

満月に 靴音遠く 襟合わせ

秋の月 思い巡らし まだ見つめ

田おもての 月ゆらぎたり 蛙起き

凍てし縁 月に宿題 見る姉妹

月明かり 鉛筆冷えて 母の声

星座追い 姉妹は寒く しゃがみこみ

信号の 車に落ち葉 止まりおり

落葉樹 霜除け作業を 示しおり

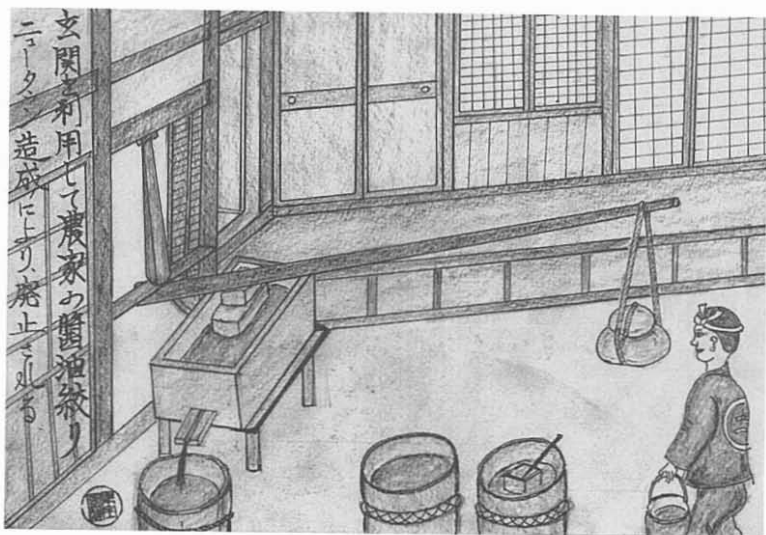
落ち葉焼く 煙たなびき 気がね増し

思い出すまに

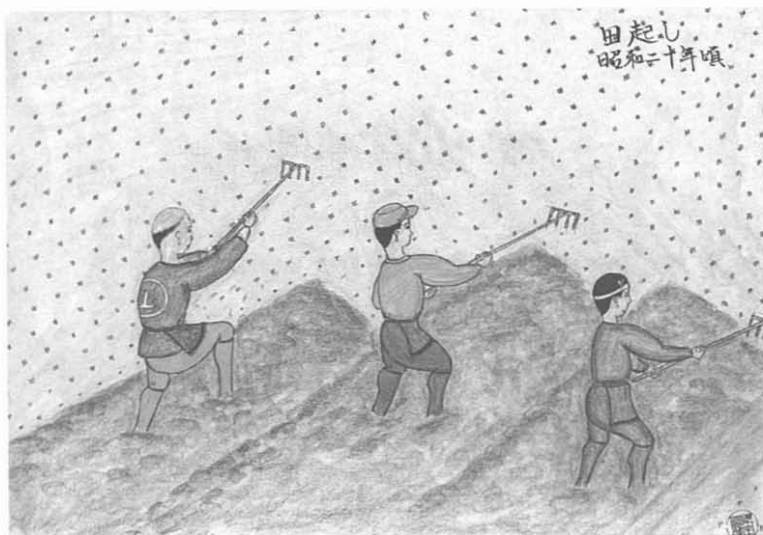
昭和40年代から始まった大規模土地開発によって
故郷は地下に埋没してしまった。

心の中に生き続けている故郷の思い出を
少しでも残したいと絵を描き続けているが
その数は約300枚にもなった。

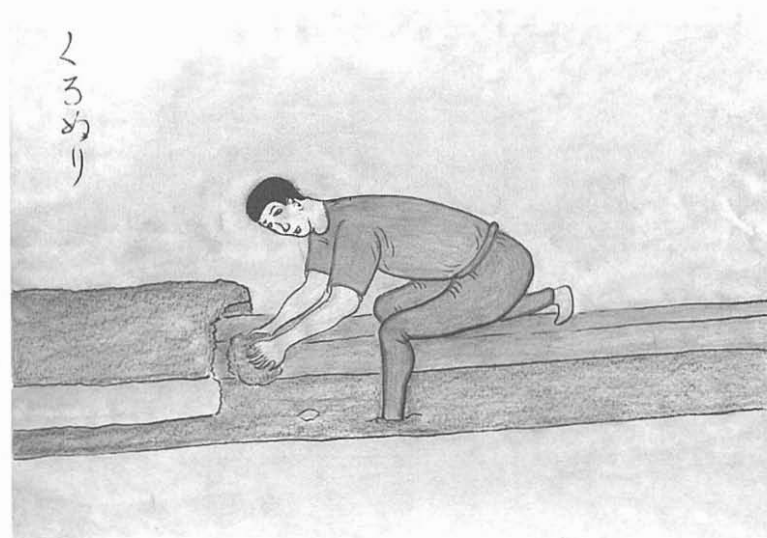
自然と人情の豊かなかつての北山田の思い出を
共有できればと一部を載せる。



開発前の農家は、醤油、味噌、油なども自給自足で作っていた。



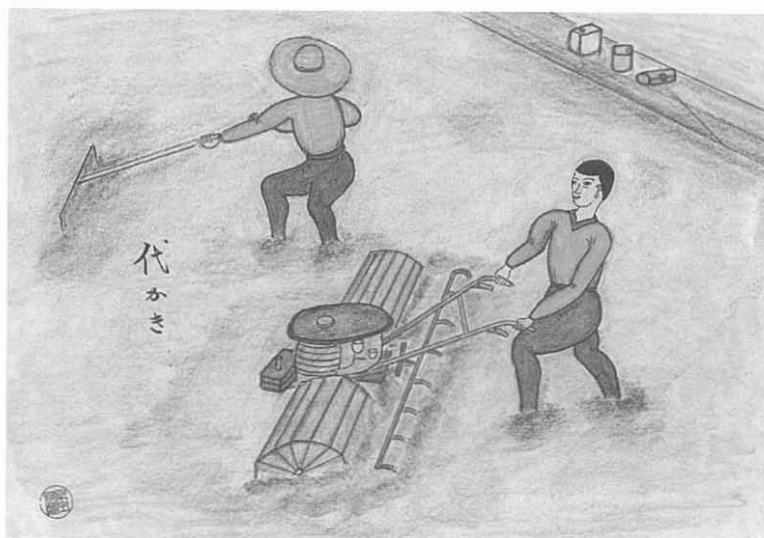
春一番の仕事といえば田起こし。冬の間堅くなった土を掘り返す作業だ。



田起こしが済むと水を引き、一枚一枚のしきりであるくろぬりをする。



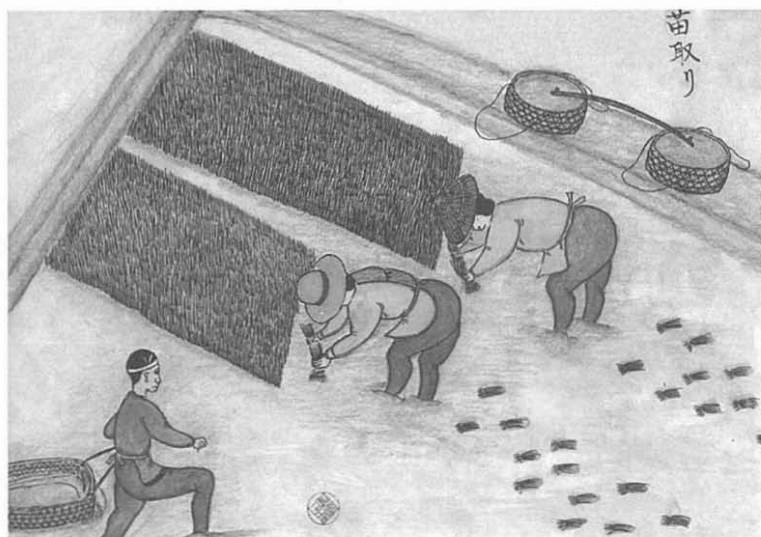
次は代かきで、土と水を攪拌してどろどろにする作業。機械化が進むまでは牛を使って行われていた。



やがて攪拌機が登場する。



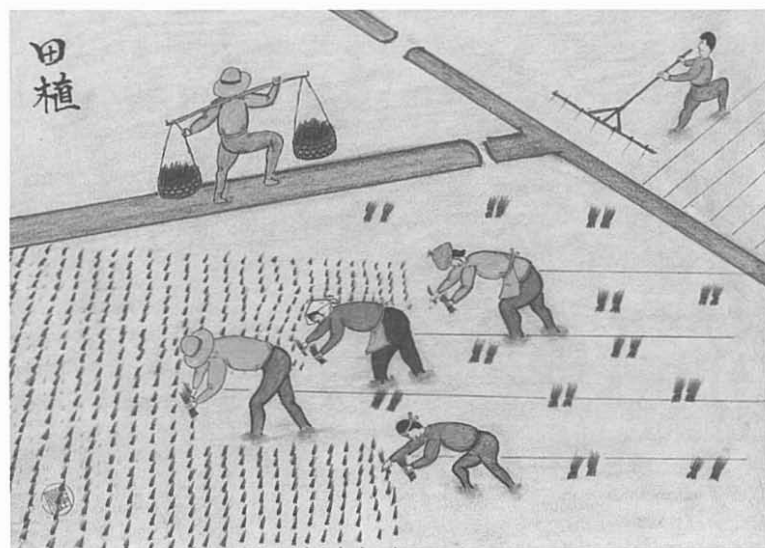
水田が整うと苗田に稲種を播く。風のない早朝に、播く人、灰をかぶせる人、軽く種を押しつける人と分かれて作業する。



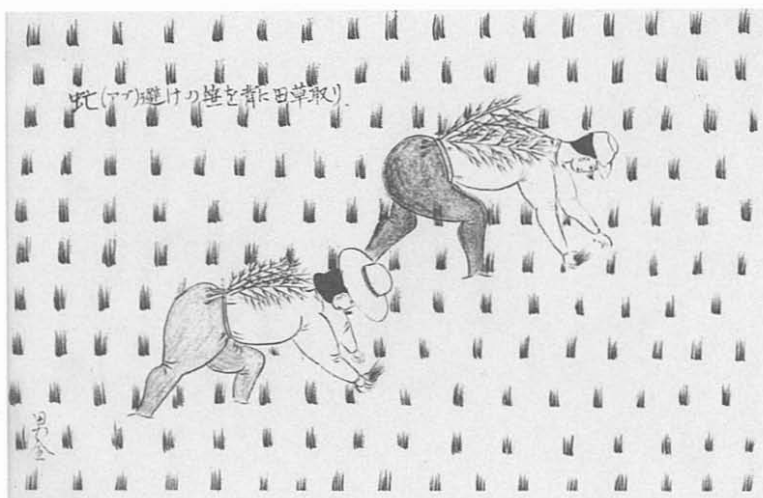
苗が10cmほど伸びると、いよいよ田植えが始まる。苗田では苗取りが主婦たちの手で行われる。長時間、腰を曲げたまま水につかっての仕事はきつい。



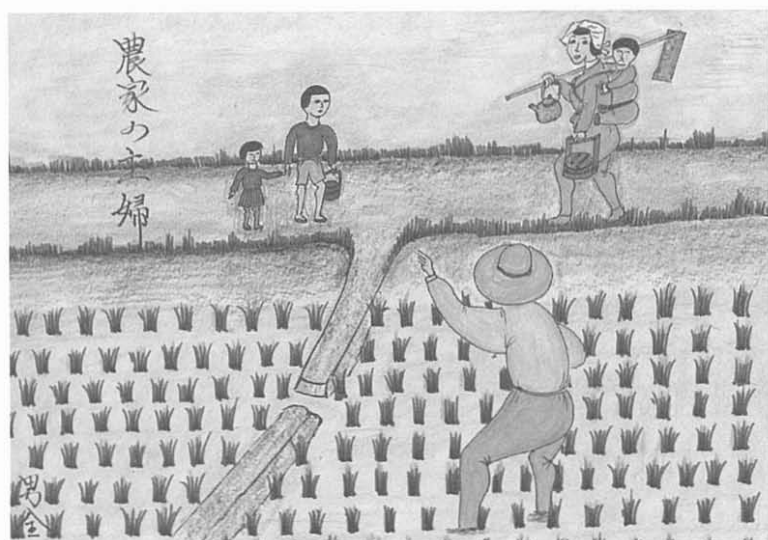
畑には陸稲も栽培され、陸稲用の苗床も作られていた。



水田では隣近所助け合って田植えが行われる。数人が並んで整然と植えていく様子はリズム感もあり美しい光景だ。



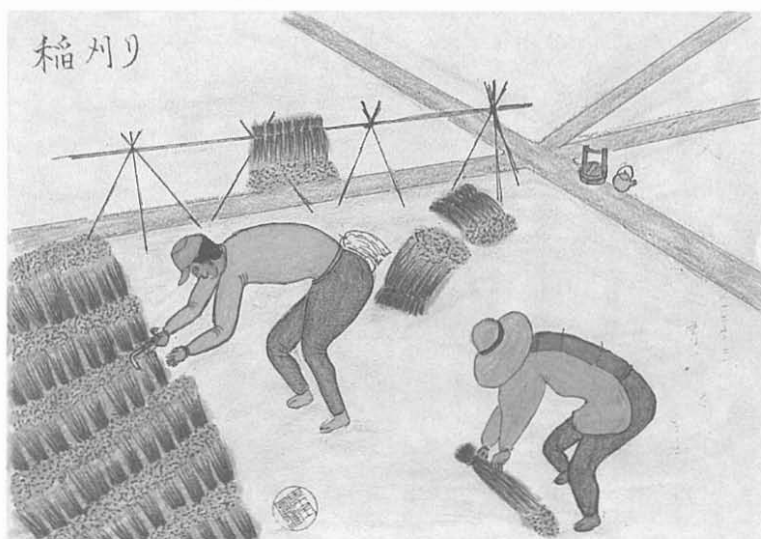
田植えが済むと今度は雑草の抜き取り作業。アブ避けの笹だけを腰にさし、一番草、二番草、三番草と三回行う。



厳しい農作業の中での楽しみは、10時、3時のお茶の時間。主婦や子供たちが田畑まで届け、ひとときの息抜きをする。



戦後普及した農薬は農業を大きく変えた。作物の病気や害虫は減ったが、さまざまな問題も起こった。



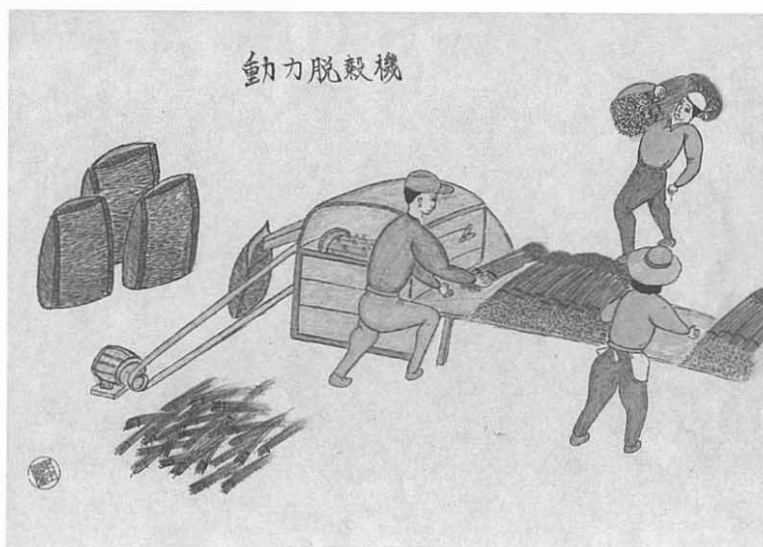
成長した稲は夏の間開花し実を結び、秋に収穫される。10月の晴天が続く頃、いっせいに稲刈りが行われる。



刈られた稲は干してから金こぎで粃を取る。



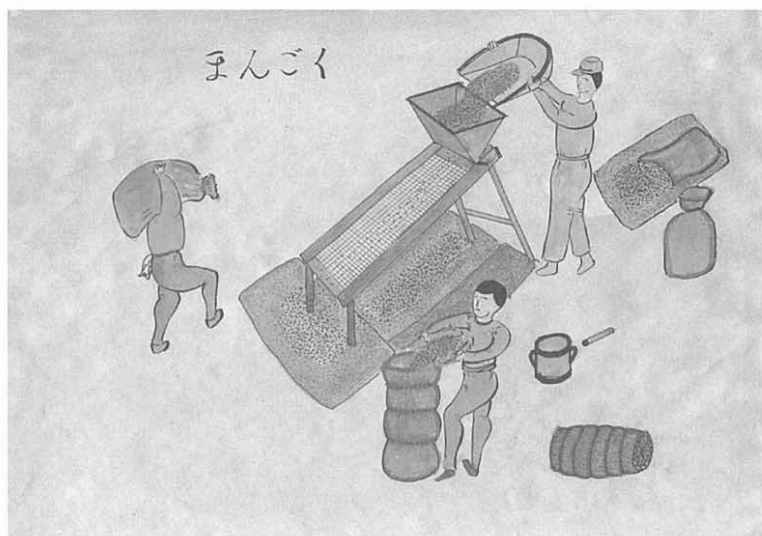
足踏みの脱穀機が使われるようになる。



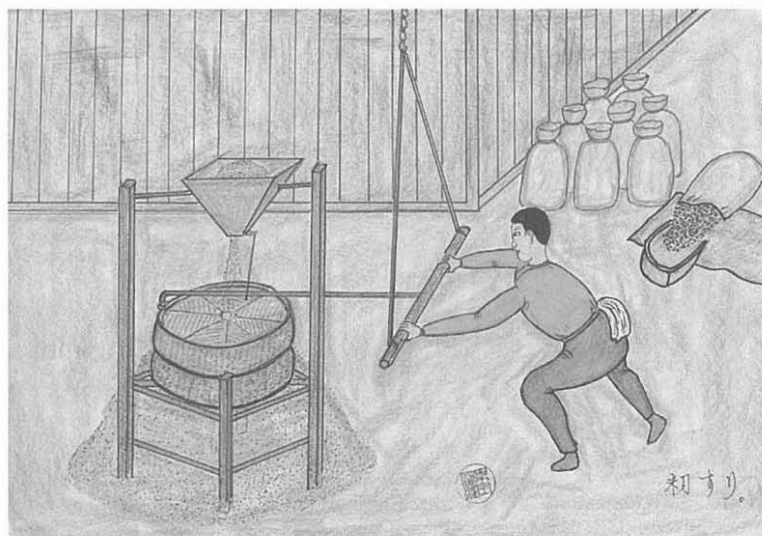
足踏みの脱穀機から動力脱穀機に。



稲藁に残っている粳は、くるり棒で叩き、一粒残さず取り出される。



分離した粳は万ごくで細かい藁やゴミを取り除く。



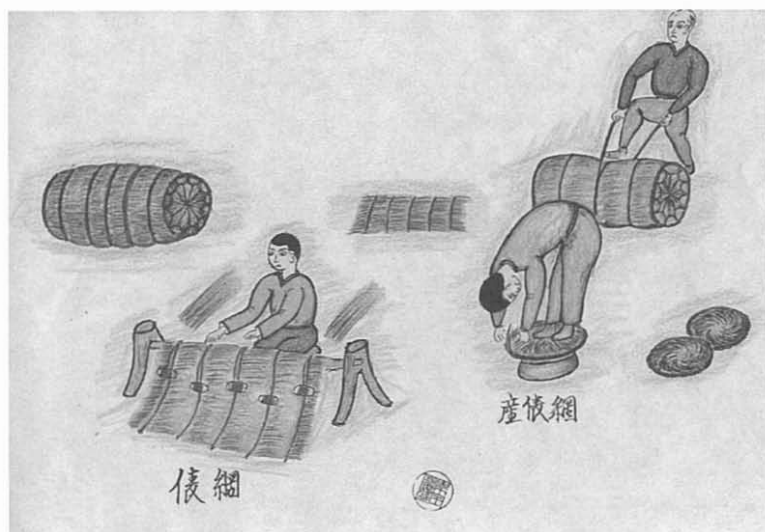
粳を石臼で摺って、玄米にする。



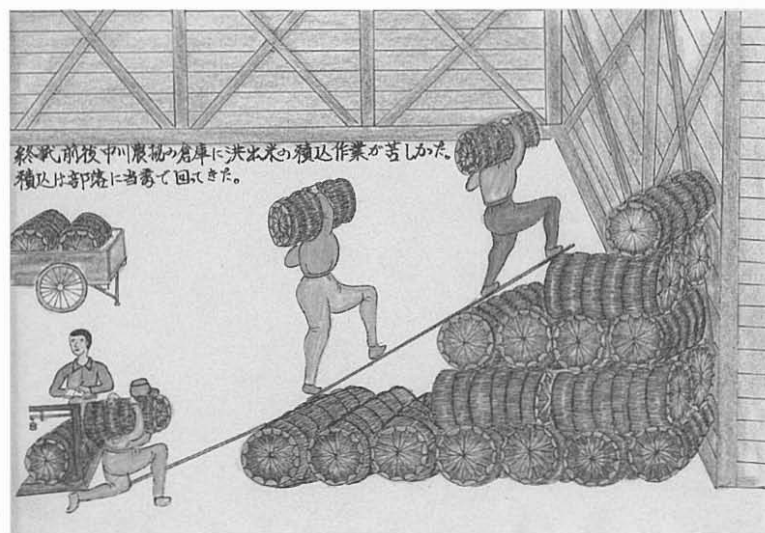
残った稲藁は丸く積み上げられ、保存し、さまざまな用途に使われた。



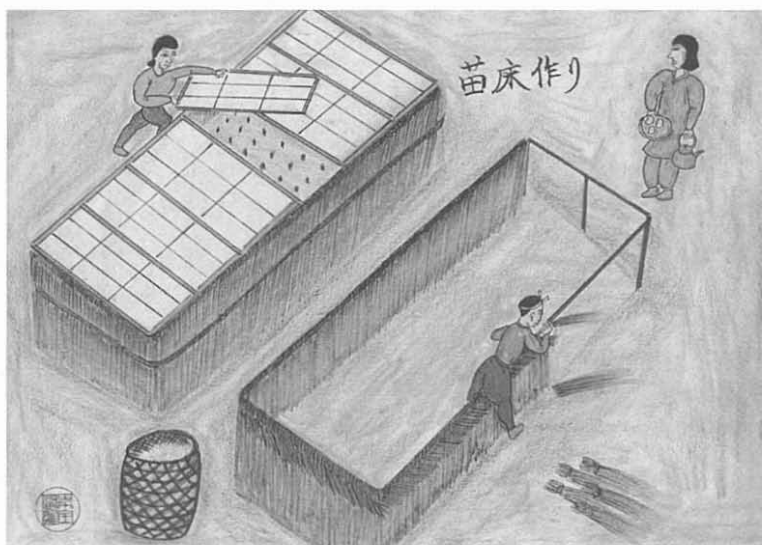
農作業のない冬の夜なべ仕事は、縄ないが主だった。子供は藁を柔らかくする藁打ちをやらされたが、たいへん根気のいる作業だ。



藁や縄はさまざまな用途に使われたが、中でも米俵は代表的なもの。国の検査があり、検査合格の印を押してもらわないと米を詰めることができなかった。



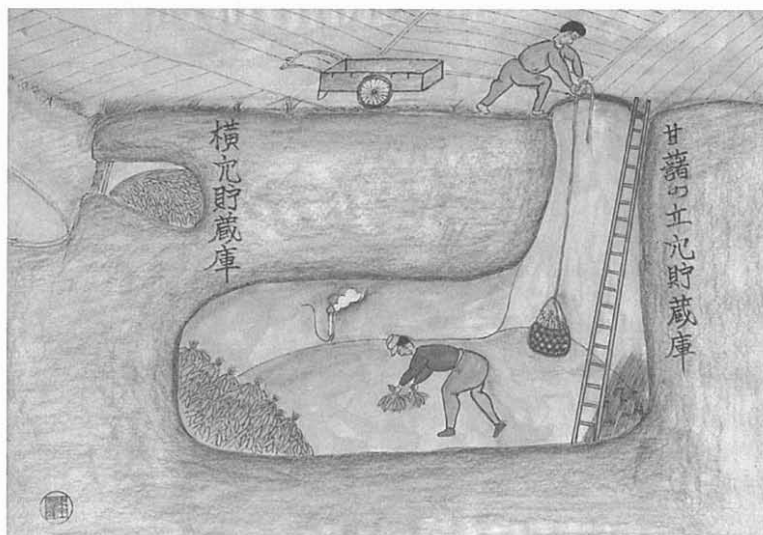
1俵は4斗で65 kg ある。それを担げないと一人前と言われなかった。



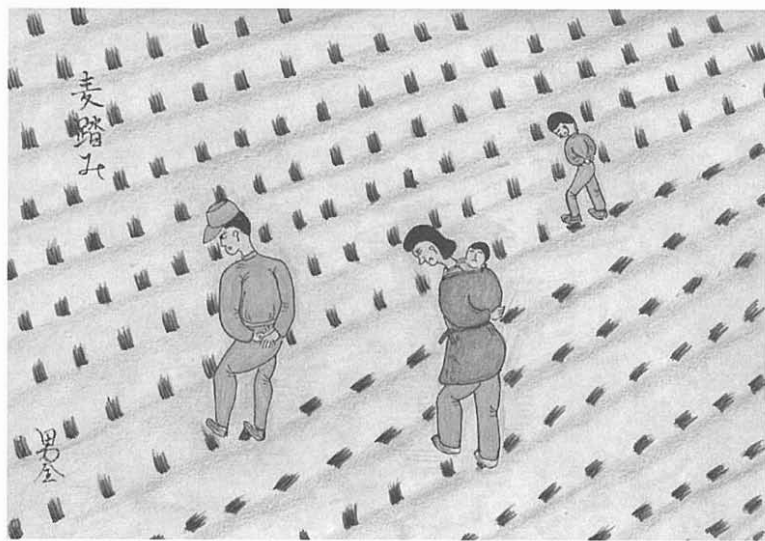
さつまいもなどの野菜の苗は、今のビニールハウスのような苗床を畑の隅に藁で囲って造り、育てた。



さつまいもの収穫。



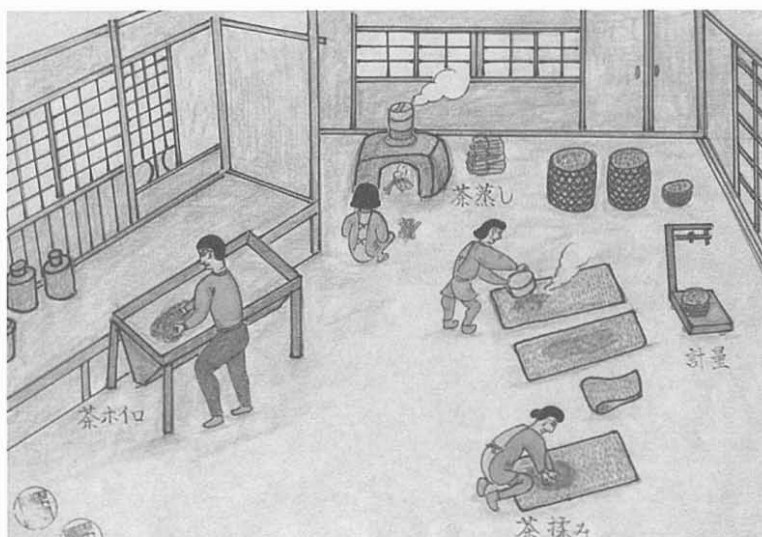
収穫したさつまいもは地下の貯蔵庫に保存した。夜遊びした若者が落ち、そっと梯子で出してやった笑い話もあった。



北風の吹く冬の麦踏み。霜柱に苗が浮かないようにしっかり踏みつける。



夏も近づく八十八夜と歌われた茶摘み。主婦たちの社交場になっていた。



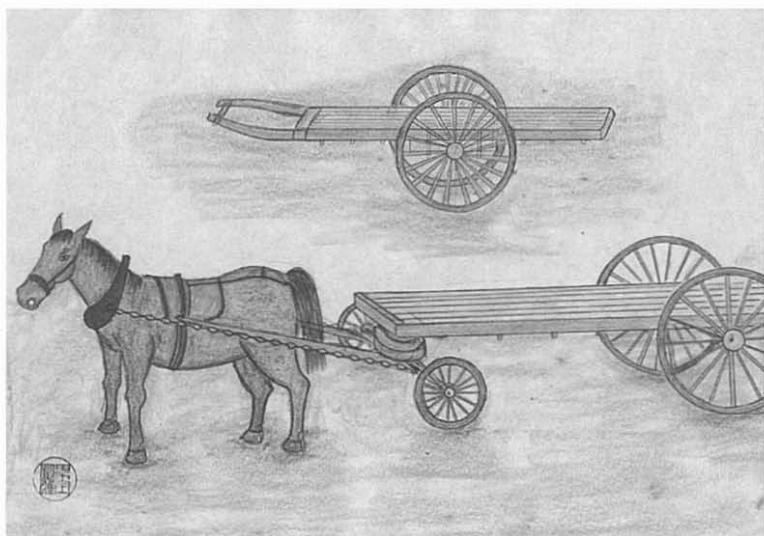
摘んできた茶の葉はセイロで蒸し、揉んでからホイロで乾燥してお茶にする。



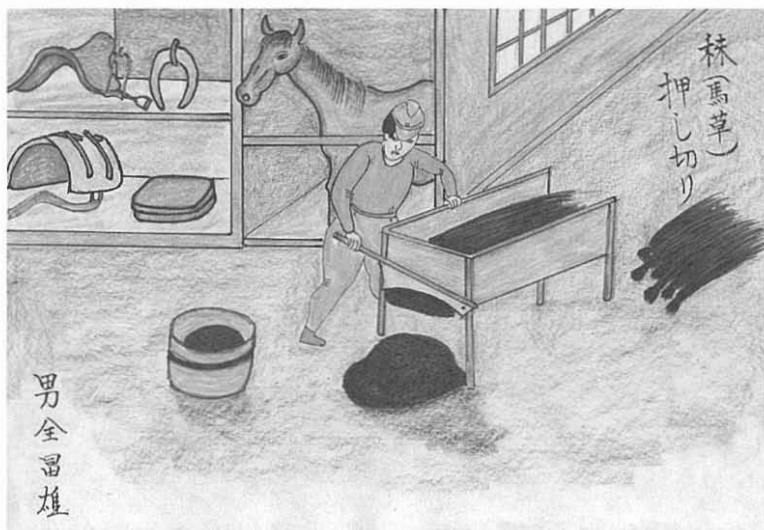
集めた肥料を舟で運び、末吉橋の手前で陸揚げしている。バランスを崩す
たいへんなことになるので、調子をとって慎重に運ぶ。



子供を背負いながら、刈り取った作物をリヤカーに積み込む主婦。



馬もよく運搬に使われた。力があり一度に多くの荷物を運ぶことができた。



馬の餌は食べやすいように切って与えた。

戦後 野菜市場にリヤカーを引く犬、
貴皇を起動力であった。

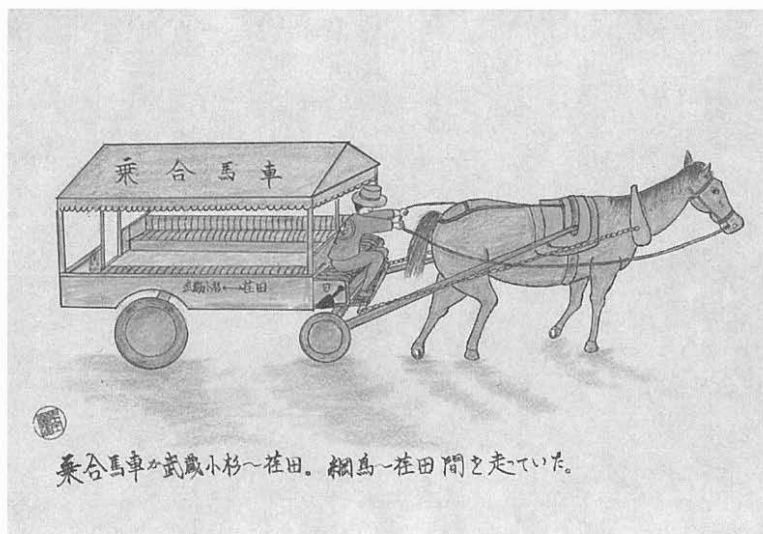


自転車にリヤカーをつけて運ぶ時、犬も使われた。北国の犬ゾリを思わせるが、なかなか役に立つ重宝な存在だった。



昭和時代
自転車で市場へ
一時期高さを競って
流行した。

自転車に荷物を積み上げ高さを競ったこともあった。市場で柱の横にビタッと止まる技術も自慢のひとつ。でも倒れたら起きあがれないのでたいへん。



土煙をあげ、パカパカと走る乗合馬車は子供たちに人気があった。



出始めた頃のバスは後ろに焚き口のある木炭バス。坂道を登る力がないので、中学生くらいの子供が押し役として後ろにぶら下がり無料乗車した。



主婦が麦を^{むしろ}筵にのばして干している。



暑い中、草取りに精を出す主婦。



石臼で小麦や米、蕎麦、大豆などをつぶして粉にする。



とうもろこしが実ると竈で焼いて子供たちのおやつに。



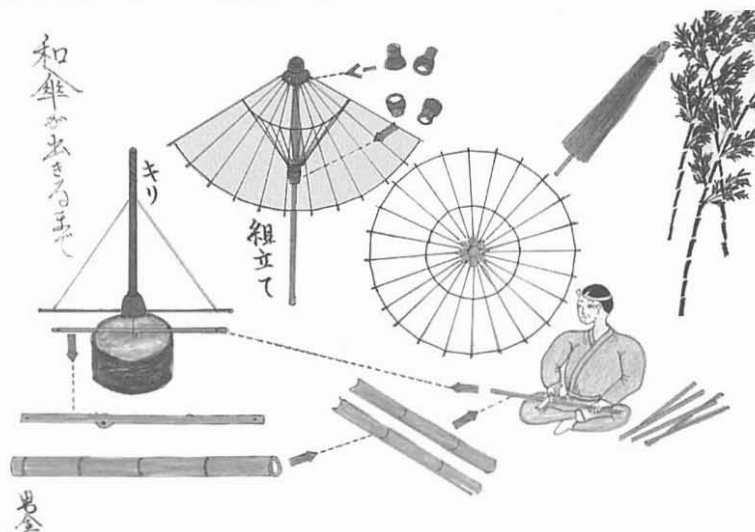
今のように車のない時代、自転車は貴重な乗り物だった。



終戦前後の食糧難の時代、一升瓶に玄米を入れ、ついて精米した。



夏は蚊やアブが発生する。竹藪にやぐらを組んで避暑地にしたが、上には虫がこないので快適だった。



竹を利用した和傘造りも行われていた。菜種油を塗った和紙を貼り、何本も並べて干している風景は美しかった。



厳寒の2月、寒餅をついた。約200kgくらいついで桶やビンに入れ、冷たい水をはって密封保存し、田植えの頃など焼いたりきなこ餅にして食べた。



冬には薪作りや、落ち葉をかき集めて堆肥を作る仕事があった。



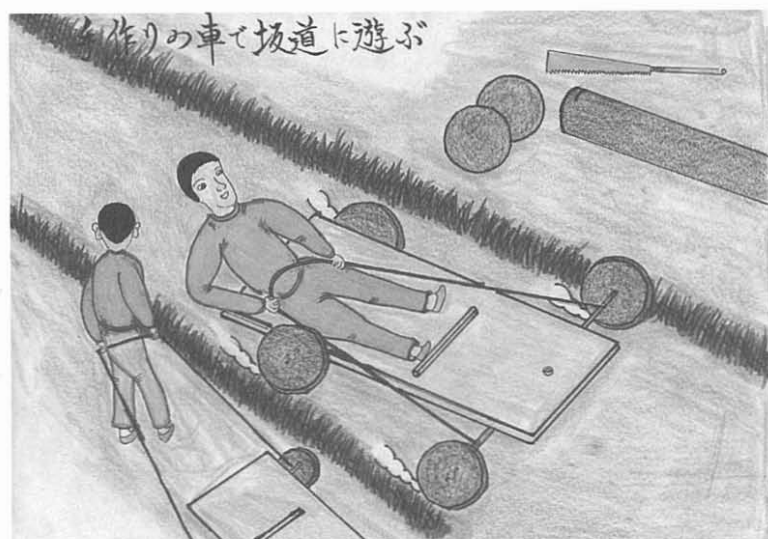
屋根葺き用の茅は特別に栽培され、屋根葺きに合わせて茅刈りが行われた。



屋根葺きは屋根職人の指図のもとに、隣近所総出で行われた。



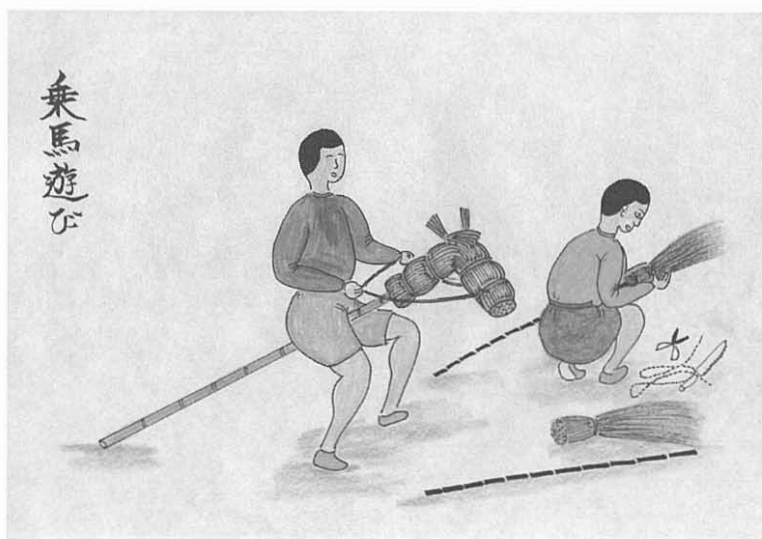
子供たちの通学風景。農繁期には赤ん坊をおんぶして通う子供もいた。



板に輪をつけた手作りの車で、夢中であそんだ。



学校の図工の時間には竹がよく使われた。



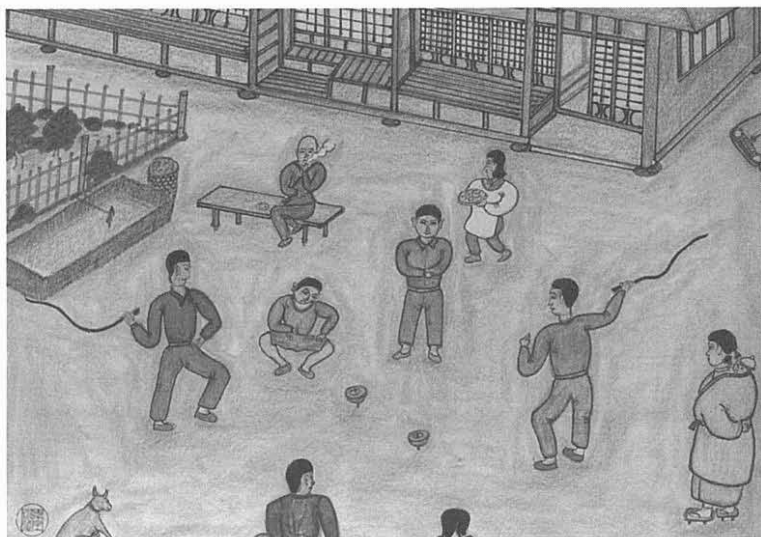
竹と藁を使った竹の馬で、乗馬遊びに興じる子供たち。



春先、巣穴にもぐっている海老蟹を捕まえて遊んだ。



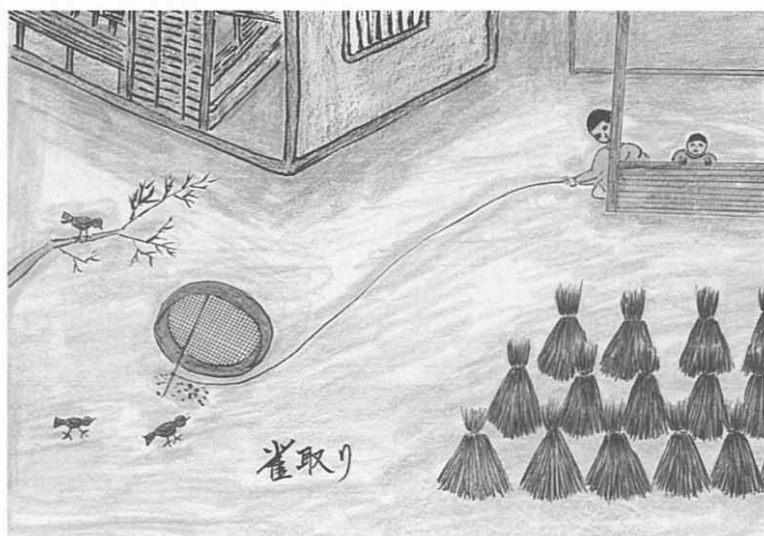
大人の自転車を横乗りして得意な子供。



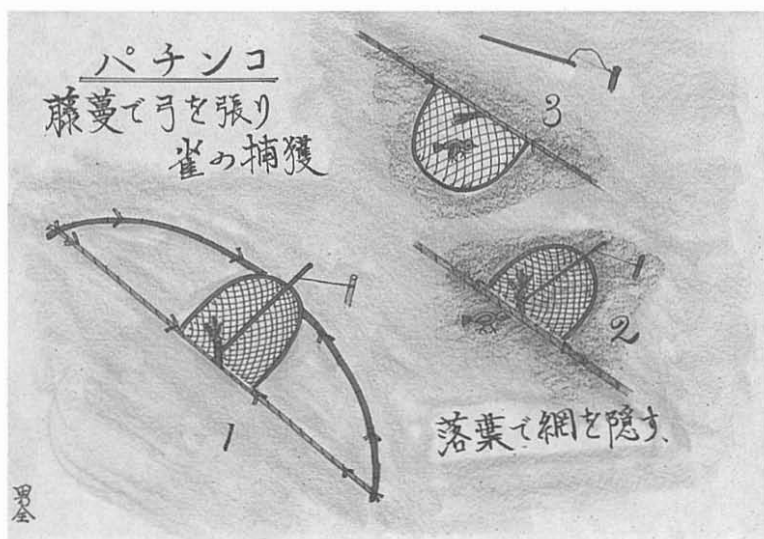
庭先や神社の境内などでコマ回しもよくやった。



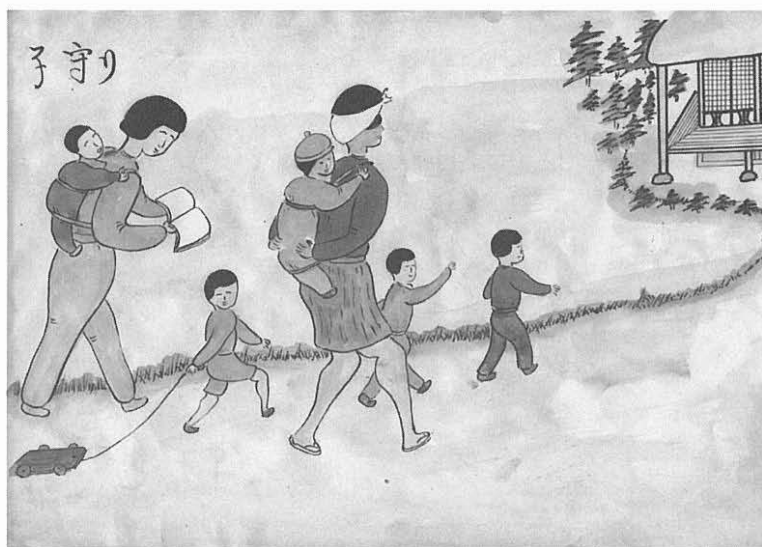
女の子の遊びはお手玉やおはじきが多かった。



雀捕りも遊びのひとつ。ワナをしかけて、物陰に隠れ、かかるのをじっと待つ。



パチンコという雀捕りの道具。雀が餌を取ろうと糸にさわれるとパチンと倒れて網がかかる。雀との駆け引きが面白かった。



学校に上がると、ほとんどの子供は子守の手伝いをさせられた。
赤ん坊を背負いながら勉強する子もいた。



手伝いは年齢によって内容も違ってくる。中学生くらいになると、
女の子でも肥料担ぎをして農作業を手伝った。

男全富雄（おまとみお）
昭和3年2月1日、北山田に生まれる
中川尋常高等小学校卒業
酪農、椎茸栽培など農業に従事
区画整理審議会5期、町会長7期務める
現在、第一共同開発株式会社（阪急百貨店建設）役員

失われたものの記録 **望郷**

発行日 1999年8月15日初版発行

著 者 男全富雄

発行所 有限会社田園都市出版
〒216-0001 川崎市宮前区野川4162ベルウッド野川401
Tel. 044-798-7248

©1999 Tomio Omata Printed in Japan

※定価はカバーに表示してあります。

※乱丁・落丁の場合は送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-924935-12-3 C0039